婦人と子ども

第七卷
第六號

第七卷第六號目次

卷首
あせたる菫　孤蓬生
小供の胎毒　瀨川昌耆
保姆の注意す可き事項　中村五六
美顏術について　肥の防人
火無し竈の實驗　本郷生
幼兒の腦及身体　孤蓬生
よしなし草　東牧羊
幼兒の摸倣的遊戯　和田實
更衣に就て　新兎義男
大陸的おさんどん　フランク
雪子と墨子　春潮漁夫
金魚の話　十時とし
雜錄……
新刊紹介……
編輯記事……
會費領收……

投稿懸賞募集

一種類
- ●お伽話　本誌半ヶ年分以上三ヶ年分
- ●短歌　本誌四ヶ月分以上一ヶ年分
- ●一般記事　選擇の上本誌に載錄せるものは內規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取らずして其指定する人に本會より直接送ることを得

一注意　短歌は隨意の用紙にて可なれどお伽話及一般記事は一行廿二字詰にて半紙又は郵紙に書かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて行く積りです。

宛名は本會へ直接御送り下さい。

開き封で應募原稿と標記すれば三十匁迄は郵稅二錢で參ります。

質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で說明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさらうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登錄して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌丈け讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

一册郵稅共金拾一錢　●六册前金郵稅共六拾錢

●拾二册同　壹圓弍拾錢　●郵券代用一割增

會告

來る八日午後一時府下豐多摩郡東大久保村高千穗小學校（植物御園前）に於て本會第四十五回常集會開會致し候に付御繰合せ御出席下されて度候

明治四十年六月五日

フレーベル會

談話材料

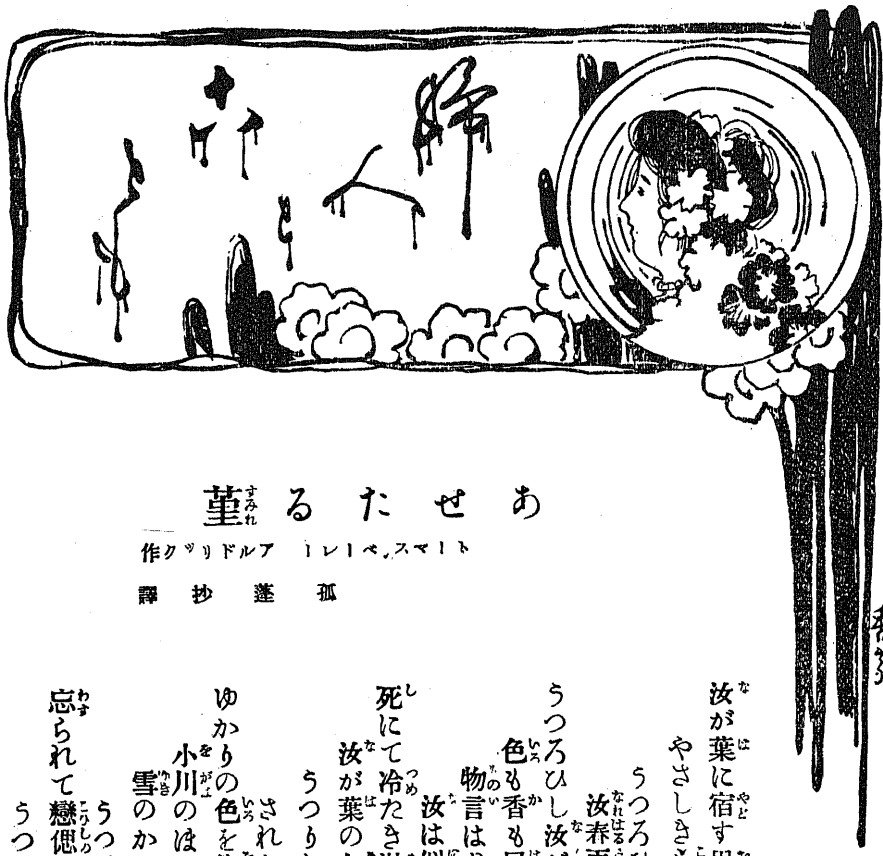
定價金四拾錢
會員特價參拾錢

豫告の通り漸く製本出來致しました。幼稚園の爲めに作り幼稚園の爲めに出版されたのは本書が始めてゞす。一本は標本として御求め願ひます。

尙豫告には定價參拾錢として置きましたが頁數が存外殖えましたので止むを得ず改正致しました尤も既に拂込御注文の方に限り會員同樣參拾錢で差上ます。

同樣に豫告して置きました遊戯書は先月中に出來の筈でしたが印刷込合のため遲延して居ります。近々出來の上は直ちに發送致す積りで居ります。

何れか美何れか愛　（泰西名畫）



第七卷
第六號

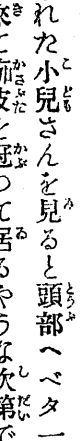
あせたる菫

トマス、ベーレー　アルドリック作
孤蓬抄譯

汝が葉に宿す思はや！
やさしき心、言はぬ憂苦！
うつろひも汝が唇に口つけぬ
汝春雨のまな少女。
うつろひし汝が唇に口つけぬ。
色も香も早や失せれど——。
物言はぬ乾ける口よ
汝は似たりさも我胸の
死にて冷たき淋しみに、
汝が葉の如く萎めるに
うつりし色に失せし香に。
されど露けき汝が花の
ゆかりの色を染めし時
小川のほとり汝をつみし
雪のかひなを偲びては
うつろひし汝が唇に口つけぬ
忘られて戀偲びては
うつろひし汝が唇に口つけぬ。

胎毒

醫學博士　瀨川昌耆君講話



▲誤解せる胎毒　私が或る病家へ參りました時側へ來られた小兒さんを見ると頭部へベタ一面に腫物が出來て痂皮を冠つて居るやうな次第で御座います、尤も其時は其小兒さんが病氣だつたのではない病人は他の方でした處が其お宅の御老人が其小兒さんを抱き乍ら「御覽下さい此子は胎毒でこの通り頭部に腫物が出來て居りますが、之れは治療しますと却つて惡いさうですネ、母の胎内から毒をもつてきたのですから出來る丈出來させなければなりません」と如何に腫物が增へやうが癒しては惡いと云つて出來る儘に投遣つてある、私は此の談を伺つて夫れは大變なお考へ違ひですと云つて色々胎毒と云ふ事に就いてお咄し仕たことがありました

二

▲民間で云ふ胎毒　民間では胎毒と云ふ事に就き右の御老人のやうに大層誤解して居られます故其事をお咄し致して置きませう先づ俗間で胎毒と云ふのは小兒の頭部とか顏面とかへ皮膚病が出來たり股間とか腋下が爛れて遂ひに膿が出たりするとか眼が赤くなつて何時もジク〳〵爛れて居るとか鼻へ腫物が出來て夫れが何時迄もたゞれて居るとか爾う云ふ皮膚病は總て之れを胎毒と稱へ、之れが容易に癒らぬのは即ち母の胎内に居るとき既に毒をもつて夫れから生れたことなれば却つて之れを癒しては宜しくないと斯くの如く世間では考へて居る、併し之れが抑も大なる誤解で決して小兒が母の胎内を出るとき斯んな毒をもつて來るものではない

▲先天性の梅毒　ケレども茲に一種の毒を持つた小兒が生れることがある夫れは即ち梅毒で御座い

ます、デ先天性の梅毒を受けて居るとすれば大抵生後一週間か二週間目で徴候を發するもの、甚しきに至つては生れたとき既に此徴候の發して居るものですが斯の如き先天性の梅毒は我が國には割合に少ないのです

▲皮膚の弱い小兒　世間で云ふ胎毒とは母親の胎内を出る時毒を脊負つて來たのだから夫れが出來る丈出來なければ癒してならぬと民間では斯んな考へを抱いて居られるが既に之れが誤解である事は前にお咄し仕て置いた通りです、元來小兒は皮膚の弱い、抵抗の弱いもので一寸した外來の掀衝でも受け易い、其内で比較的皮膚の弱い體質をもつて生れた小兒に多く腫物の出來易いのです即ち外來の掀衝を頭部へ受ければ其處へ傷が出來て遂に痂皮になるやうな譯です、夫れであるから此胎毒は必ず十人が十人出來るものでないことは良くお解りになりませう

▲食物の迷信　外來の刺激で皮膚の變化が起り傷にでもなると其變化が容易に癒りません、夫れ故乳兒に斯んな腫物が出來ると先づ母親の食物に非常な注意をして、何が毒だ之れが毒だ腫物の毒になる食物を喰べれば夫れが乳汁へ出て來て容易に治療らぬと斯ん　考へを抱かれます、又食物を喰べる時代の小兒になると「此の食物は腫物の毒だ、那れも毒だ」と非常に食物を嚴重にしますが何も之れが世間で云ふ程決して嚴重にすべきものでない。餘り世間では食物の禁忌を嚴重に仕過ぎます

▲食物と病氣　總て食物は體内に於て營養になる部分は分解され營養にならぬ部分は體外へ排泄されて仕舞うのですから、食物が直接に病に影響を及ぼすものでは無い、故に民間で云ふ胎毒に直接惡いと云ふ食物のあるべき筈はないのです、結局之は食物に對する一種の迷信と信ずるのであります

▲香料と一般の小兒食物　併し斯んな事の例があります小兒に餘り多く香料を與へると夫れが爲め

局部に充血を起して痛みを起さぬとも限りません去れど小兒は香料を好むものではない、即ち酒とか唐辛子芥子のやうなものは一般の小兒は食べませんせん故に腫物の出來て居る小兒とて普通一般の小兒食物を與へて一向差支にならぬから、爾う嚴重に食物を禁忌するには及びません

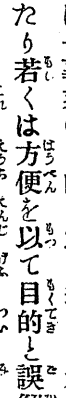
▲胎毒と實例　民間では小兒病を胎毒と云ふ誤解された名稱が附けてある此胎毒の患者を連れて參りまして「御覽の通り此兒は頭部から面部へかけて腫物が出來て居りますが、ドーモ胎毒ですから治癒しては惡いと思ひ、出來る丈出來させて放棄て置く」段々增る計り、尤も喰べ物は矢釜しく嚴重に注意をいたして此兒にも毒なものや性分の強いものは一切喰べさせませんし、夫れに未だ私の乳汁を幾分か飲ませますから私迄も食物は氣を附けて居りましたケレども何うも段々日增しに容體が惡くなるやうに見えますから治癒しては惡いと申しますが一ッ御診察を願ひたい」と斯う云ふ事を申して診斷を受けに參りますものが隨分澤山御座います

▲食禁の弊　胎毒であるからとて腫物を治癒さないで置くのは非常な誤解である小兒の皮膚に弱いものは抵抗力が弱いから隨つて刺激を受け易いので腫物も出來安い皮膚の強い弱いは其小兒の持つて生れた體質ですから之には據どころない事ですが胎毒であるからとて直ぐに治癒さぬのは大間違ひなことで此事は前にも詳しく述べて置いた通りです、次に所謂胎毒と食物の關係ですが之れが非常な誤解で小兒の食物から親の食物（まだ乳汁を飲む子供に對して）に迄左程嚴重な注意を拂ふ必要がない、斯く迄食禁を迷信して折角身體の滋養になるべき食物であり乍ら之れも惡い那れも惡いと俗間で云ふやうな食禁をしたなら却つて腫物は早く治らないのです凡て病氣には適當なる滋養物を取らなければならぬのに、世間には夫れを反對に考へて、滋養になるべき食物を却つて胎毒に毒

だと云つて居ます誤解もまた甚しいではありませんか、故に小兒に適當な滋養なら性分が強いの、毒だのと云はずに安心して喰べさせる事をお勸めいたすのです夫れから母親の食物が母乳に影響する事など決して懸念に及ばぬ事と斯う御承知を願ひたいのです

▲内攻と云ふ事　小兒の胎毒とは何か一種の毒を母親の胎内から受けて產れでも仕たやうに考へられて居る此事が既に誤解なるは前に詳しく述べて置いた通りで即ち黴毒の外は母の胎内から持つて生れた毒は無いと云ふ事も良くお解りになつたらうと信ずる、然るに茲に尙胎毒と云へる語弊に伴はれて内攻と云ふ事を世間で申されます「胎毒を癒すと内攻するとか」或は「胎毒が内攻した爲め愛兒を亡した」とか斯ういふ言葉は屢々耳にされるでありませう、爾うして内攻する事を俗間では何れ程恐れて居るでせうか、併し内攻に就いては又一ツの誤解かあるので夫れをお咄し仕て置く必要があります

▲胎毒の内攻　世間で云ふ胎毒とは孰れの病症を問はず小兒の外部へ出來た皮膚病腫物類は總て之れを胎毒だと云つて居る、併し胎毒と稱するものゝ中には色々の病症があるので、醫師の診斷に依つて單純な皮膚病と認められたものも矢張胎毒だと稱せられ、癒しては往かぬと云つて廣が扱ふに就いて世間一般の母親の考へです、ソコで斯くの如き皮膚病に冒された小兒に多くあるのは時によると全身に水腫を起して來るが、斯く水腫を起して來ると世間では夫れを胎毒が内攻したと云ふのでつまり外の病が内部へ侵入して一種異つた病を引き起すといふ意味なのです



保姆の注意す可き事項

中村五六

一方便を目的と誤認す可からず

世には一事業の目的と之を達する爲め方便とを混同したり若くは方便を以て目的と誤解するものが尠くない。之を幼稚園事業に就て見ても唯恩物を與へたり、唱歌を授けたり、遊戯を爲せるのを直に其目的として敢えて幼兒心身の發達狀況如何を顧みないで甚しきは其施す所の方法をも解せず、爲に却つて多大の惡影響を與ふるものが少くない樣である。憂ふ可き次第である。故に保姆たるものは先づ平素期する所の目的を定めて其目的を達するには如何なる方法を執る可きかを了解しなければならぬ。即ち保姆はまづ保育上適切の目的を有し、之を達する方便を考へなければならないのである。

二幼兒の思想の範圍を明知す可し

幼兒の思想は漸次に啓發して次第に其範圍を擴張するものであるのに其程度を計らず、唯保姆自身の考で以て種々の事項を授けたのでは多くは幼兒思想の範圍外に逸してしまつて、爲めに幼兒には馬耳東風で寸効もないか若しくば知らず識らずの間に幼兒に對して抑壓を試みて害惡を與ふることがないとも限りません。故に保姆たるものは能く幼兒の思想の範圍を知つて居て之に應ずる訓育を施すことに注意しなければなりません。

三幼兒の相性に注意す可し

幼兒發達の度に應じて之を數組に分けて、保育を施すのは通常のことで、そして此一組を恰も一個の人の如くに考へて之に保育を施すのは一の便法で利益のあることは云はでもの事で、今日一般の學校が級別制を取つて居るのは全く此利益に因るのであります。然れども之を一方から見ると各個

の幼兒に注意しつゝ各自に適切な訓育を加へると云ふことに就ては何うも劣る樣に考へる。一體級とか組とかに分けて同時に教育すると云ふことは年齡が長ずるに從つて其利益が多いのですが幼少のものに對しては其効が少いものであります。且つ幼兒の自然の狀態に就て考へて見ると其組をなして居る數は三五名若くは七八名に過ぎない。それが小學時代になると稍其數を增して來、中學時代になつて始めて數十名の團體を造つて遊びを共にするのである。然るに幼稚園で無理に數十名の幼兒を一組として常に之を一人の如くに取り扱ふのは其自然に反するものと云はなければなりません。一室の中に數十名の幼兒を收容すると云ふことが設備の點から來たとすれば、尙一層幼兒の個性には注意に注意を加へて此級制上からの缺點を補ふ必要があるでせう。殊に幼兒中に特別な性質があるものなぞは尙更之に相應した取り扱ひをしなければなりません。

四事の輕重を明にす可し

幼兒の性質は純粹無雜であるから之に教育を加へるに當つては、能く事の大小や輕重を辨へて濫に之を賞したり、輕々しく之を罰すると云ふ樣なことがあつてはならぬ。又大事に疎で小事に密にすると云ふことでもいけぬ。故に些細の事に對しても其根源を明にし結果を察して教育的の効果を收める樣に處置しなければなりません。從つて保姆から命ずること、幼兒の意に任すこと、の別を判然して長上の命令を遵奉し、他人に對しては好意を以て接する樣な習性を養ふことを務めなければなりません。

五無用の干渉を避く可し

幼兒の諸能力の發達と云ふものは、總て自己の活動から出て來る遊戯に因るものであるから、其發達を見樣と思ふならば幼兒を或る可く自由に遊戯させて決して其活動に掣肘を加へてはならぬものである。且つ幼兒と云ふものは勞力の結果に對し

てよりは活動其ものにあるのであるから之に妄りに干渉すると云ふことは假令夫れが一層の好結果を得樣とする爲であつても避けなければならぬ。此樣な遊戯は其利益は決して幼兒にのみでなく保姆の方に取つても多くあるものです。何故と云ふに此自由遊戯の際には幼兒は各自の好む所、欲する所を爲して能く其性質を表示するものであるから、之を觀察するのに最良の機會となるからであります。

六遊戯と代仕との別を辨ふ可し

凡そ遊戯と仕事とは其原は何れも活動です、唯遊戯と云ふものは活動其物を目的として居るけれど仕事は之に反して活動の結果を必要のものとする所で兩者は大なる差異を生じます。即ち仕事は活動の結果と云ふものを尊ぶから、自然幼兒の自由を掣肘して難事を强ふるから、從つて多少苦痛を感ぜしむることがあるのです。故に名前は仕事でも其作業が單に幼兒の興味を刺戟するに止まるならば亦遊戯と云ふことが出來ます。

七年齡の差は其價大なるを思ふ可し。

幼兒の年齡の差は一ヶ月と云ひ一ヶ年と云つても大人の一ヶ月や一年などゝは數理上は其價が非常に大きいと云ふことを知らなければなりません。即ち年齡三年或は五年のものの間の一年の差と云ふものは三十才四十才乃至は五十才位な人の間に於ける一年の差などゝは決して同日に見ることは出來ないのであります。斯る譯で幼兒と云ふものは年齡に應じて其發達に著るしい差がある譯であります。然るに世上一般の人はまだ此區別に對す注意が薄すいのは嘆ず可き次第であります。

八幼兒を取り扱ふ方法は敏速なる可し。

幼兒は其性質として、一事一物に注意を傾けると云ふことは出來ないけれど、絶えず諸種の事物に注意して倦むことのないものであります。保育者は此具合を心得て其實施の方法が敏速で、幼兒の急速な心の轉換に伴ふことが出來ないで何時も幼

兒の後を逐ふ樣になつて、幼兒の心が既に他に移つて居る頃に強いて之を此方に向け樣と云ふことになるから表面は幼兒の不注意と云ふことでつまりは保姆の徒勞となるばかりである。故に幼兒を取り扱ふには能く後敏速な性質に應じ其精神活動の機に乘じて之を左右する機敏と熟練とを具有しなければならないものです。

九幼兒心身の運用は普編なるを要す。

幼稚園保育の目的と云ふものは畢竟幼兒の圓滿な發達と云ふ所にあるのですが斯る發達は諸心力の普偏な運用によつて始て遂げられ可きものであるから精神諸力及身體各部を偏重なく運用せしむ可きは勿論の事と云はなければならぬ。然るに世間には保姆の指示誘導するに當つて、却つて偏重の運用を爲さしむる事實が尠くない。例へば或る手技を授けるに當つても單に視覺に訴へることがあり。遊戯に於ても終始同一の運動に限る樣なことがある、幼兒が隨意に製作遊戯に從つて居るときは自然の命によつて身體各部を動かして諸種の感化や心力を用ふるものであることは注意深き觀察者の常に認めて居る所である。世人が動もすると不良の保姆に對して寧ろ其幼兒を放任して置いてほしいと云ふのは主として斯る弊があるからである。

十幼兒に其社會の一員たるの念を抱かしむ可し

幼兒の既に幼稚園に入つて來た時には一個人であると同時に當社會の一員であるから相倚り相助けて互に親愛して社會の結合を固くして一般の利益を思はせなければならぬ。即ち年長者は自已の有用なることを認めて滿足を感ずるし少弱なものは自ら順從の幸福なことを知つて終始快樂喜悅の間に仁愛、正義、從順尊敬、忍耐、勤勉等の諸德を養ふことが出來て遂に忠良の臣民たるの資を得ることが出來る。

十一幼兒の交際は隱微の間に勢力の大きいものであることを忘れてはならぬ。

幼兒をして其友に對して親切好意を以て相交り、自然に存する主義の情を制し若し殘忍野卑の所業があつたら之を匡して温和優美の行儀となし又卑屈怯懦の精神があつたらば之を矯めて不撓有爲の氣象を養成せしめると云ふことは幼稚園に於て務む可き所であります、然れども幼兒が相接した時には其効があると同時に又弊害も生ずるものである。然も其効力も弊害も實に隱微の間に大勢力があるものでず。故に幼兒は知らぬ間に其性行が著るしく善良に向ふことがあり、或は不良に向ふことがあります。是等は其原因は保姆い誘導ではなくて却つて其知らない間に幼兒相互の間に生起することが往々あります。故に平素周到な注意を以て幼兒交際の影響を精察して所謂保育課目の外に於て保育の効を擧げることに注意しなければなりません。

十二幼兒の取扱上特に男女の別を設くるの要なし。

凡そ爲の發達の初歩と云ふものは其性質も行動も同一で發達の程度高くなるに從つて漸次分離して互に差別を生ずるものであります。幼稚園時代の幼兒にあつては其考ふる所も其の爲する處最も男女に依りて異る事はありません。故に之を誘導するに當つても同一の目的、同一の方法で澤山です。故に男兒には許して女兒には許してならぬと云ふことはないのです。尤も男女の天賦を云ふものがありますから多少其趣きが違つて來るのは自然に一任して充分です。彼の從來世俗に行つて居る樣な男女の格段な區別は却つて兩者の區分を極端ならしめるもので男は益々粗暴に女兒は益々卑屈に陷る樣になるものです。

美顔術について

肥の防人

私は眞面目に美顔術の御話を致します。私の面相を御承知の方々は「あの顔で美顔術の講義もないもんだ」と、テンではねつけられるかも知れませんが、しかしそれは御考違でこざりませう。生れながら美人であつたら、誰が美顔術杯研究するもんでせう。私は美人でないから大に研究しましたので、その結果をこゝに公にするのであります。先づ順序として、愈々の美人といふものはどんなものであらうか、大略標準を極めねばなりません申さば理想の美人です。それには左の各項について考へねばなりません。

一、丈恰好、肉附、姿、歩き振、手足の大小

二、皮膚の疎密、黑白、血色。

三、頭の形、顏面の輪廓、面部諸道具の位置、大小、形狀。髮及眉毛等の黑褐、疎密、直縮。齒。

四、音聲

五、全身の健康、血液の純潔、筋力

以上の諸項にわたつて申分がありませんければ、之はどこへつき出しても格別ひけをとらない美人でありませう。それで、私のは、單に美顔術ではなくて、全体の美人術であります。

この美人術を實行するには決して手おくれになつてはなりません、又その間に不注意があつてはいけません。手おくれになつたり、過失があつたりしますと、佝僂だの出臀、鳩胸などになつたり、又生れもつかぬ盲、聾、啞、手蹠などになつて一生不幸に終らねばなりません。おそろしい事です

それでその美術の第一着手は重に母親のする事で祖父母も家に在る叔父母も兄弟も之を手傳ひます之を保育と申します。「もしあなた、この子はいかにも小さいぢやありませんか」「ムウさうさね、

チト肉食を多くして、成分の濃い乳でも出してやつたらよかろう』『もしあなた、この子は餘り蒼白いぢやありませんか』『ムウ少し日向へ連れて出るがよからう』こんな事がその實行の一部分であります。それからだん〳〵に子供が大きくなつて、そこらかけまはる程になりますと、父親が直接に差圖する事も加へて來まして、『御前はいつでも首をすくめて居るぢやないか』『お前は少しあるかせるとすぐ弱るぢやないか、ドシ〳〵運動して足を發達させねばならぬ』杯の類が多くなつて來ます。之を家庭教育と號けます。之と同時に幼稚園教育や學校教育といふ事も段々盛に行はれて來て、子供が十四五歳になりますと、先づ一通りの美人術が濟んだ事になるのであります。

さあ、斯樣に一年三百六十五日、父母を中心として祖父母、叔父母、兄弟、隣家のをぢさん、をばさん、幼稚園や學校の先生の片時目放さぬ美人術の實行のおかげで、生れもつかぬ眼一になつたり、ちんばになつたりしなかつた事は世の若い人達の大に感謝せねばならん事であります。かたはでさへなければそれで美人の及第點だけはたしかにあるのです。かたはであつても仕方がないのぢやありませんか。それに何ですか、少し色が黑いとか、鼻が低いとか言つて父母の賜物に不足をいふ杯は全く罰あたりの考ですよ。それはナル程かたはでない丈では「妾は美人です」と自慢する事は出來ますまい。しかしそんな自慢をした所で誰も餘り感心はしません、のみならず、それは元來、根本に間違があります。凡そ右申した及第以上の美人といふものは、大神みんな同等であります。梅も櫻も紫雲英も形や色や恰好は皆それ〳〵にちがつて居ますが、みなそれ〳〵に趣を備へて居ます。それに、櫻でなければ花で無い樣に言ふのは、言ふ人の超趣の至て淺薄な事を示して居るのです。物は一長一短、完く備はつたものでありはしませんや、ね。美人だつて同じことです。それに、御

本人達が梅でありながら、花梗の長い櫻の花をつけて見たがつたり、げんげでありながら木の枝に咲いて居たがつたりする樣の事を考へるのは、それは常識のあり過ぎた一種の濁世狂といふべきものでありませう。狂人はとても美人のうちにかぞへられません。

それにまあ、譬ても考へて御覽。今こゝに一冊の本を綴ぢたと考へて見なさい。その綴ぢ樣が氣に入らんからといつて全くやりなほして綴ぢかへて御覽。ナルホド綴のところは見よくなりませう。けれどもその前の綴穴の傷は到底免れません。その上持ちなぶつたが爲に、最初の樣に綴がチャンと締つて居ません。「嗚呼こんな事なら初から我慢して居たものを」と後悔するに極つて居ます。ですから角張つた顏を丸めたり、低い鼻を高めたり杯する樣の事はたとひ出來ても、どこかにそれだけの傷がのこります。それはその筈ですもの自然が年月かさねてしたしごとに、人間が一時にさかしらを加へて見るのですもの。誰やらが句に「手にとるなやはり野におけれんげそふ」といふのがある。こんな事に手だしをしない方が後悔がありません。現に私のよく存じて居る婦人に、眉を濃く見せようと思つていつでもいろ〳〵の黑い物を塗つた結果、眉毛の發育を害して、短いしどろの眉毛になつた人があります。御注意なさいませ「角を矯めて牛を殺す」といふ事もあります。

さりながら、斯樣に申上げた丈では私の美顏術といふ事は少しも技倆がわかりません。で、極て特志の方には、全く私の秘密專賣、無害有效請合、天下唯一無二の御傳授を致さんでもありません。イエ、ナニ別に謝儀は申受けませんでよろしいから、その代りこの秘傳を讀んだ以上は必ず之に歸依する決心を願いたい。讀んで御歸依なさらなんだら、秘法だけに、屹度罰があります。ヒョットよく御會得になつて御修行なさらうものなら、すべての美ならざる點はのこらず美になつて

有害どころか、却て健康をすゝむる事が請合であります。

先づ色の黑いのを白い以上にする事。諺にも「色の白いのは七難かくす」と申してホンに色を白くさへ致しますれば、他の少々の事は決して目障りになりませんで、事によつたら、却て愛敬になります。例之ば少しおですこであつても、また隨分お多やんであつても、色が白かつたら、却てそれが愛敬になつて、餘計に人の目を惹きます。元來美人の目的は人の目を引いて愉快に感じらるゝ點にありませう。ですから、よくその目的さへ達するなら、何も必ずしも卵に目鼻が美人と限つたわけはありません。ところが私はその色を自由に白くする、いや白い以上にする法を知つて居るのです。則ち私の說法をよくお聞きになつたら色の黑いのが直ぐ色の白いと同等以上になります。先づ色の黑いのはその精神のたしかなことを表して居ます。それに、色白のかくす事の出來ない一難を色黑はかくす事が出來ます。

それが何であるかと申せば、色白は怒つたり、恨んだり、驚いたりしますとすぐそれが顏色にあらはれて、甚だ他人の快感を殺きますが、色の黑いのはその點大丈夫です。餘計黑ければ黑い丈一向わかりません。ですから、世間でも、「色の白いのは七難かくす、色の黑いのは八難かくす」と申します。それで、どうですか色の黑いのはなほりましたろう。イユ、色の黑いのはなほらんでもそれを氣にする病がなほりましたろう。何も茄子であつて白瓜を羨んだり、椎茸であつて長芋をそねむ事はいりません。しかしまだもつと難をかくすものが御入用なら御傳授致しませう。それをよく御服用になつたなら、あらゆる難が皆なくなります。單にかくれるのではなくて、全くなくなるのです。三角な顏が丸うなります。痘痕が靨になります、お多やん位は天人になります。のみならず、グント全身の健康も進み、血液も純粹になりま

す。之が私の美顔術の最秘最奥の所で、若し御精進のわるい、貪、瞋、癡、慢の汚れがあつては及第は出來ませぬ。一切の貪、瞋、癡、慢を去つて、「どうか美人になりたい」といふ唯一心の信心で、お服用なさい。それは外ではない左の事を紙に書いて朝、夕と寢みなしによむ事です。

笑顔よいのは十五難

よく之を御服用になつて居られると、しまひには御顔から御光がさす樣になるかも知れません。ダイヤモンドも何もいつた事ではありません。そのかはり一日でもこの服用を忘れて、不平面、佛頂面、泣面、おこり面、慢チキ面、慾張聲などお出しになると、百日の茅を一日に燒いてしまひます。之が若し御參考になる節があつたら誠に難有い事でございます。終に申しあげておきますが、私の研究した範圍では、この外に多少參考になる樣の美顔術といふものは決してありません。世間でいふ美顔術は會々前號に宮崎君の言はれた通り唯の化裝法に過ぎませぬ、

（完）

混砂米は無害

混砂米の衛生上に有害なりや否やは一般社會の注意する所にして過般内務省に開ける地方長官會議に於ても亦此問題に就て頗る議論ありたる由なるが其後衛生局は特に衛生試驗所に於て試驗を行ひ北島、横手二博士等の意見をも徵して綿密に研究したる結果有害に非ずと決定したり然れども該試驗は單に東京米に付てのみ行ひたるものなれば之を以て一般各地に於ける混砂米を律すべからざるは云ふ迄もなきとなるを以て各府縣に於ても日常食用する混砂米に對し充分なる調査を施し然る上更に衛生局に報告することになり居れるが要するに現今一般に使用する程度に於ては決して有害なりと認定する能はずとのことにて混砂米の禁止は當分これを不問に措くならんか

火無し竈の實驗（第四號の續き）

本郷生

火無し竈の結果の良否は大に鍋の大小に關するものであるが、精しく言へば、鍋の中のものに含まれたる熱量の多少に關するものであるが、さて小人數暮しの家庭に於ては、勢ひ鍋を大きくすることが出來なくなるのであるから、鍋が小さくとも輕便に而かも好結果ある方法は何であらうかと云ふ考への許に吾等が試みたるものは次の方法である。醬油の空樽に半ば籾殻を入れ、手を以て之を凹にし、其中に今しも沸騰した土鍋を入れ、丁度籾殻が鍋の緣に達する位迄深く埋め込み、其上には甚だ緩く詰めたる籾殻の蒲團を蔽ふ。但し塵が鍋の上に落ちかゝるを豫防する爲め、此蒲團を敷く前には鍋の上には新聞紙の幾重かを載せて置いた、籾殻の蒲團の上には、樽に附屬せる木の蓋を載せたのみである。若し之れで成効するならば、綿蒲團を用ふるに比しては手數が甚だ少く、且つ全く特別の器具を要せぬのであるから至極よいことだと待つ構へながら、例の如く四時間後の温度を測定したるに、數回の實驗の結果は、

四合入りの土鍋の時　鍋中のもの、温度五十七度乃至六十二度であつた。此れは綿を以て行ひし時の結果に比ずれば寧ろ大に優つて居る。

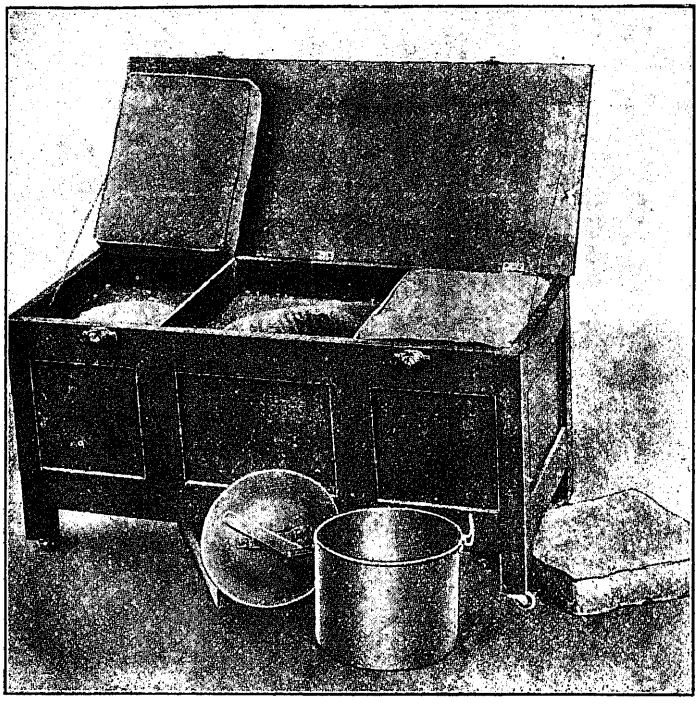
次に二升入りの大土鍋を以て仝樣の手續きを行ふて見た。之れには土鍋が樽の入合にしては大に過ぎ、從て籾殻が入るべき餘地が少ないので實は如何がかと案じて居つた。然るに四時間の温度は七十一度を示し、之れに入れわりし豆は完全に煮熟して一點の非難の容るべき點が無かつた。

試みに十二時間後の温度を驗して見たが、大土鍋の時には四十九度、即ちやつと指頭を之れに浸し居ることが出來る位の熱さである。小土鍋では三十四度まで下つて居つた。

以上のざつとした實驗の結果によつて、余等の考

へが歸着したところは左の如くである。籾殼の中に鍋を埋めると云ふことは最良なる方法の一つに相違ない。而して鍋の大なるほど結果はよい。

吾等がかゝる實驗を爲しつゝある際に新に到着した雜誌は、火無し竈が獨逸駐在の米國公使によりて米國に報告せられ、ルーズヴェルト氏の命令の下に其筋の專門家が實驗に取りかゝりて、無上の好結果を得たと云ふことを記載してあつた。仝時に家庭用とした火無し竈の最新式なるものが圖示せられてあつた。上に掲ぐるものは即ちそれである。箱は長さ三十六インチ、廣さ十五インチ、深さ十七インチ、之れに用ふる鍋は三つあるが特に此目的の爲めに造られたるもので、一つの大なるは五升を他の二つは二升五合を入るゝ程の大さ。何れもエナメルを着せたもの即ち所謂瀬戸敷鍋である。猶はそれに附記したるところによれば、此器を用ふれば、普通の仕方に由るものに比べて、煮熟する迄に約二倍の時間を要する。但し如何に永く置いても煮え過ぐることはない。薪炭の儉約は頗る出來て家婦の重荷は殆んど半減する云々。



幼兒の腦及身体

孤蓬生

幼稚期に與へられた注意の如何によりて、子供が後になりて善くなるか惡るくなるか、又學校期になりてよく其教育の効が顯はれるか顯はれぬかといふ點に大へんな相違が出來る事は勿論である、で今子供が學校へ行く前、即ち生れてから七年位迄の間の事を少しく述べて見やう、けれども一体人間が自然的に一歳から七歳、七歳から十四歳と、ちやんと區別がある譯ではない、兒童心身の生長發達は一分でも休まずに連續して行くものである、之に期を分けるといふのは只研究上の便宜であるといふ事を、一寸斷はつて置かなければならぬ、

幼稚期に於ける兒童の生長發展は非常に速かである、初め生後一ヶ年位の間に頭は其周圍十五吋位から十九吋、即ち殆んど四吋の生長を見るのである、此成長に伴ふて兒童の機能の發展が其動作擧動に現はれるのである、此間に体重は八百三四十匁より二貫三四百目位までになるのである。

兒童の生れたてには感覺によりて來たる刺戟が印象されぬ、只筋肉の力の著しい事と睡眠と反射的運動とを交る〳〵やつてる事が其特徴である、讀者諸姉は嬰兒が其小さき楓の手に諸姉の指などを固く握られて其力ある事に驚かれた方もあるでせう、どうかすると其摑まれたまゝ引き揚ると其子供がもちあげられる事があります、四肢は大低曲げて縮めて居ます、之を伸ばさうとすると恐ろしく力を入れて反抗するものです、指なども固く握りしめて居るものです、併し背の筋は甚だ弱く、小供を坐らせやうとすると中々眞直にはなりてゐない、首や背はぐた〳〵である、

此時分の兒童の運動は感覺によつて制御支配されず腦の活動によるものであるから此を自發運動と

いふ事ができやう、此自發運動は早くからあるもので腦の特徴として稍長く續くものである、之は身体の小さき部分即ち指、趾などによく顯はれる、即ち數本の指が一所に開いたり又趾と指とが一所に呼應して開閉する事がある、嬰兒を膝に跨がらしてゐると下を見ながら前へ蹋まうとする時、足の小指と手の小指が一所に外へ向つて開くのを見た事がある、嬰兒は覺めてる時と睡眠と相交替してゐるが其眠つてゐる時には瞼は閉ぢて運動はやみ只靜かな呼吸が通つてゐるのみであるが此時そつと瞼をあけて見ると、瞳子は小さく縮まつてゐるが眼球は動く、之は腦が活動してゐるのだといふ事を示すのである、

小供を躾けるといふ事はもう生れるとすぐ必要である、小供は漸々に表情を初め、視覺聽覺などによりて支配されるので新らしい動作が初まる、此時に當りて乳をのます時間とか、睡眠の時間とかの規律如何によりて規律不規律の癖が出來、他日品性を造る上の基礎となるものである、頭腦の發達に從ひ健康の養育が必要になつてくる、正しき哺乳、適度の光線、清潔、寢室の換氣の適當なる事、戸外の運動など凡て之等に後々に鍛錬さるべき機能を先づ作る上に於て必要な事である、或物を細工する前には先づ其に用ふる良き材料を作るといふ事が大切である、

嬰兒の頭には顖門といふものがあるのは誰も知つてゐる、こゝに脈搏のうつてゐる事を見るでせう眠つてゐる時でも絶えず脈搏はあつて、動脈血は常に頭腦中に送られつゝあるといふ事がわかる、注意して見ると小供が弱いか又病氣になるといふと此脈搏が低く微かになるのがわかる、同時に自發運動も沈低し小供は誠に動かなくなる、之腦の活動力が減退した事を示すのである、普通此顖門は凸狀になつてあるべきものだ餘り凹んでゐるのはいけない、勿論頭の圓形以上に凸出してゐなければならぬといふのではない、よき血液のよき循

環は腦の活動には最も必要である、心臟の鼓動に適應して此頭腦の脈搏がうつ外に呼吸の度に此脈搏が昂がる、又烈しく泣いたり何かすると著しく脈搏が高まるものである、胸廓が自由に擴がる事は血液の循環を充分にするもの故之が直に腦へも影響する事を注意しなければならぬ、顱門は周圍の骨の發達に從つてなくなるものである、七ヶ月位の時が最も著しい時で一年も立つて殆んど分らなくなる、

生れた時の子供の腦は大抵男で凡そ十一オンス半位女で十オンス位（一オンスは五匁五分程）であるが六ヶ月から一ヶ年も立つ　男兒で二十七オンス半、女兒で二五オンス半位になります、實に著しい發達といはなければならぬ、

胸は生れた時には男兒で普通十三吋餘、女兒で十二吋半位であるが五年で二十一吋半、七年で二十二吋半位になる、肺臟は生れた時には大低平均二オンス半位五年から七年位までに殆んど九オンス

位になる、之も隨分大なる發達をする、

一年の終頃になると小供は他の者の眞似を始めるこの時期になれば既に或る程度までの訓練をなし得るのである、小兒の時代を通じて習慣といふものに注意して躾けなければならぬが殊に此の初めに最も注意しなければならぬ、併し規則正しいと言ふても餘りに極端に過ぎて一分一秒も違はずに哺乳の時間を定めんとするが如きは不可である、此點に於てロックの唱へた主義即ち餘り几帳面すぎざる主義は一面の眞理のある事と思ふ、併し此方面の極端に走つても惡い事故其中庸を得るに務めた方がよいと思ふ、

子供の遊び好な性質、活潑な性質は奬勵したがよろしい、子供の玩具は數は少なくてよいが撰擇は注意しなければならぬ、

腦の狀態、作能等は早くから其表情、運動、身体の均衡、各部分の調和、感覺に誘導されて起つた動作の適應等をよく注意して觀察しなければなら

ぬ、之等は神經の各系統に於て生する活動の標であるまた直接の結果である、心内の活動は凡て運動及其結果によつて表現されるのである、

で腦の活動の一般性質は十ヶ條に分つて述べる事が出來ると思ふ、其中或ものは極く幼さ時に又或者は少し遲くになりて見らるゝ者であるが何れも其養成を要するものである、

（一）、腦活動の自發性　之は嬰兒の特徴であつて顯門に於て見らるゝ血液循環に比例するものである、小兒の顔付の表情、口のあたりの微笑の具合などを精細に觀察すると、小兒が見又は聞く所のものによつて外部から刺戟されて動作するのでなく、全く自發的である事が分る、微笑の時などは其顔面の變化が先づ口邊から目、次に額に擴がつて行くものである、あやしてから笑ふといふ樣になるのは餘程生長してからである、眼は外部の物に導かるゝ事なくして上下左右に動く、手はよく其自發運動を爲すものである、足や肩など皆外に原因なくして自發的に活動する、此自發運動は七八歳になるまではあるものである、之より長ずるにつれて身体の自發運動はなくなり隨意運動が發達するものであるが、心的自發作用は長く持續するものである、即ち想像思考の如き全く現在見たり聞いたりして居るものとは離れて無關係に自發的に働くものである

自發運動は病氣又は腦の欠損ある場合にはなくなるものであるが舞踏病の場合、憤怒せる時等には過度になる、

（二）、腦の感受性　之は嬰兒の中にはないものである、此時分には視覺聽覺によりて來たる支配といふものがない、但し温寒や飢の時には其感受性が働く、泣くのは其結果である、三四ヶ月立つと感受性は著しくなりて來て視覺聽覺によつて印象を生ずる樣になる、之は瞬間の運動抑止によつて表はれる、

（三）、運動の抑制　之は前に言つた樣に四五ヶ月

の時分より現はれるものである、即ち或視覺なり聽覺なりを刺戟するものがあると今までやつてゐた自發運動が急に止まつてしまふ、しかし之はほんの一時で直にまた今までの自發運動を續ける、刺戟は依然續いて居つてもそれには拘はない、又時には前のと違つた運動を始める事もある、之が進むと小兒は或物体の見えた爲に數秒間其指をじつと動かさずにゐるか、又時には手を延べて之を捕へんとし指はそれを掴む、こういふ運動は注意といふ心的狀態の第一歩を示すものである、即ち精神能力の芽が出た標である、學校の兒童でも教師が發問すると一寸運動の中止があつて靜かにするものである、此の運動の抑止の間に心は働いてゐるのである、即ち此時の靜止は睡眠中の靜止とは違つて新らしい活動が心中に起るのである、

(四、視覺聽覺にする統御　之は小兒の周圍より來るものに適應せんとする運動によりて見られるものである、即ち視える物を捕らうとしたり、話するものに頭をむけたりする事でわかる、此位の時分には其支配は一時である、小兒の絕えず動いてゐる自發運動をすぐに止める事が出來れば或印象を與へたといふ事は明らかであるが之丈ではまだ腦を支配したとは言はれない、人は小兒を導き、新機な有用な運動をさせて周圍の事情に適應させようとするのであるが、こういふ統御は視覺、聽覺によつてやれるものである、小兒が見、聞する事に應じて行ふにより其統御の効がわかるのである、小兒活動の統御は聽覺によるよりも視覺による方が善い場合がある、之は兒童の模倣性は視る事によつて發揮される事が多いからである、

(五)、筋肉感覺による統御　手や指が動いて物体の形や容積を感じ又物体の全体又は其部分を探ぐる爲に手を動かす事によつて腦印象が得られる、如何なる動作でも其の動作によつて外物が感ぜらるゝばかりでなく其筋肉の動く度合が又腦中樞に感ぜらる、之等は筋の運動によつて得られる印象

であるが、又筋の緊張によりて得られるものがある之は即ち重さの感である、小兒に此筋肉の感覺が發達してゐるかどうかといふ事を試驗するには表情が生じて來ないとわからない、

（六）、腦の復合作用　此の機能が發達するに從つて精神能力に導く腦作用の基礎を作るものである各感官より入りて腦に達せる刺戟は更に二三の神經中樞を刺戟し、其刺戟されたものは神經傳流を起して再び靜止する、かくして適應せる運動なり表情なりが生じて來るのである、此刺戟し動作するのが秩序整然としてゐないで一事物に對して數神經が一時に働からうとすると互に衝突を起して適當な動作は出來ない、神經中樞の相互作用は小兒の表情の具合でわかる、それは知覺によつて生じたものとは大變違ふ、子供が單に人の動作を模倣する場合には、個々の動作は視覺によつて導かれ中樞の中に必ずしも相互作用は生じない、運動が記憶によつて繰り返へされる場合には中樞は相互に以前の順序によりて再び働くものである、此の複合作用の經過は嬰兒にはない、兒童の把住力が發達するに從つて作り上げられるものである、此の複合作用の適當な筋道の形式を練習する事が必要なのである、

（七）、腦の把住力　之は或る身体の運動などが其一連續の順序をよく繰り返さるゝ事によりて見らるゝものである、又語や思想の一連續を繰り返へすによりても知られる、運動なり思想なりに對する腦中樞の排列の把住は其骨て生じた生理狀態の排列の順序に適應するものであるといふ事は理の見易い所である、即ち中樞間の神經の通過せる順序で動作が起るのである、子供を統御する爲に用ふる命令の條件を把住するといふが大切である、命令の語は統一的に用ひられ兒童は明瞭に之を聞きそれから初めて秩序ある動作がなされるのである、把住は明瞭に、きつぱりと、精確に印象を反覆する事によるのである、把住は小さい嬰兒には

ない、之は秩序的の習慣、規律正しく物をするといふ事によつて形成さるゝものである、記憶は此把住の一つの形である、

(八)、伴起動作　之は感覺によつての統御によつて初め生じた運動の一連續に於ける規正を意味するものである、子供が球の投けつこをやつてゐるのを見ると一人が投げた球を相手は受け取つて又之を投げ返へす、之は相手を視覺に感じ次に球を認め瞬間に運動を起す腦中樞の順序を定めるのである之によりて伴起動作が出來るのである、幾度も練習すると神經の機械的作用は益々精確になつて來る、此伴起動作の速かなる進歩は他日發達すべき心的能力の善い徵候である、此能力の發達は練習によるものである、即ち神經傳流の通過する道筋が反覆によりて深刻せられ、一つの暗示が與へられると直ちに複雜な一連續の動作を確實にやつてしまうものである、精神作用即ち思想の連續も亦之と同樣である、

(九)、運動領域の擴張　外面各部の運動は一ケ所より如まつて漸々其領域が擴がるものである、微笑は初め口が擴がりて次に眼が少し閉ぢ目になり頭は少し傾き氣味になりやがては手や指までも運動を初め、遂に哄笑するに至るものであるが、實に全身体が之に關與する樣である、小供に心算をやらせると舌が少し前に出て眉が寄つて、頭と眼は上を向き口唇の邊に少しの運動が表はんる、其他怒つた時とか怪我した時とか皆身体各部に運動のひろがるのを見る、之等は皆數多の神經中樞が共に働いて神經傳流を傳へるものであるといふ事を示してゐる、

(十)、刺戟に對する腦の應答或る感覺を與へると之が中樞に入りて運動となり表情となりて外へ出るまでには時間を要する、勿論精神作用に費やす時間が入用であるからである、或る發問をしてやると之を答へるまでには小しの時間がかゝる、之は精神作用の複雜簡單の度の比例する事は勿論であるが其精神能力發達の度にも比例するものである、嬰兒の間は只一物体を見せて之を摑ますか如き簡單なる事でも比較的長い時間を要する、之も教育訓練の刻によりて著しき發達を示すものである

よしあし草

東牧羊

晝漸く長く、夜やうやく短き昨日今日、朝寢に晝寢に、追々寢心地よくなり行くを覺ふる折柄、理屈づくめの教育論は、徒に、眠氣の種子とやならん、さりとて、家庭問題の話も、何となく鼻につくが如き感じもせらるゝに、さらば、何ッがなと、短夜の一時、かきつゞりたるよしあし草を左に、

一、電話道德

電話にての話はなるべく、用談にして簡單にするが、電話使用者の道德といふものなり。格別の用談もなくて、何時までも、何時までも、話しつゞくる人、殊に婦人に多し、一言にて濟む挨拶に、十言、百言を饒舌り、時に、益もなき戯談に、笑ひ戯るゝなど、何れも、電話使用の旨を心得ぬ仕方なり、といふべく、無駄の手數に交換手の迷惑は、言はずもがな、他よりの折角の用談も、之がために妨げらるゝこと少からず、學校官廳などの電話を使用する人は、殊更、注意を要す。

自己專有のものに在りとも、かゝる公共のものは料金さへ拂へれば、己が勝手になすことを得べしとは申されず。

すべて、人に迷惑をかくることは、道德の趣意に反するが故に、電話使用の心得を知らざる人は、矢張り、不道德たるを免れざるなり。

二、往來道德

道路を通行するに、人の妨害をなして迷惑をかくるものは、又道德的ならぬ人なり。左側通行は、一般の安全を計る爲めに、道行く規則として其筋より勵行され居るにも拘はらず、恬として右を右をと歩きて、人や車や衝突するが如きこれなり。

多勢にて行くに、大道狹しと、横列に廣がりて、ぶら〳〵無駄口たゝきつゝ人の妨をなすが如きも

亦其一なり。かゝる事は、學校の往復に於ける學生（男も女も）に殊に多し。

三、玄關道德

訪問の客を長く玄關に立たする癖の主人あり。これも面白からぬ事なり。玄關に入りて、音なへば先づ下婢出で來る。名刺を出して主人に面會せんことを乞へば、これを持ち去りて再び出で來るに、約十分、やがて座敷に通されて、主人の出で來るまで又十分も費さる。

かゝるは主人の、別に急用を處理しつゝあるにもあらで、たゞ外見の爲にするが多し。速に接見するは、威嚴を損する所以と考へ居るなり。來客に對して禮なき業といふべし。

四、交際道德

人に對して始終面白からぬ顏をする、無愛想なる無遠慮なる等は、何れも人に不快の感情を起さするものにして、宜しからぬことなり。其道德的ならぬ分量は、他人に對して禮を缺き、他人に對して傲慢なると同じ位のものなり。無禮、不遜、傲慢、輕薄等は、人多く不道德として咎むれども、無愛想、無遠慮等は、反つて、其人の天眞の發揮せるものとして「あの人は、元來あゝいふ人で」といふ調子にて、これを咎めざるが常なり。前者程にはあらざるも、他人に不快を與ふるに至りては、同一なり。之を天眞の發露といへば彼も同じく、其天性の爛熟なり。天眞爛熟は、凡べての場合に於て、悉く道德的とはいふべからず。殊に禮を旨とせる他人との交際に於ては、人に愉快を感ぜしめんがために、已の天性を抑制せざるべからざる場合多し。普通の事情に於て、自己の氣儘のために、他人を不快ならしむることは、實際不善にして、他人に快感を與ふるは善なり、傲慢、不遜、輕薄等の行爲の、故らにすると、其性質なるが爲とを問はず一般に不道德と稱せらるゝ所以は、單に有形的の損害を人に與ふるが爲にあらずして、不快を感ぜしむるがためなり、相當の禮義

が、一般に道德と一致するは、他人に快感を與ふるが故物を與へて人を喜ばしむることも慈善なれども言語擧止動作に由りて人の精神を快からしむることも亦善事なり。さらば本性無愛想な人、無遠慮な人、面白からぬ顏のみして居る人は、少くとも、夫に由つて不快を感ずる人に對しては、不道德の人といはるゝも免るゝに由なきなり。

▲人の達したる最高所　輕氣球に乘りて最長距離を航行したる人は有名なる佛國のヴォール伯にして伯は千九百年十月カスチョン伯と共に巴里より輕氣球にて露國のコウオスチエツフに達したるなり兩地間の距離は千二百哩なり輕氣球にて最高所に達したる人は英國のグレーシャー及びコツクスウエルの兩氏にして其高さは三万七千呎なりと云ふ

●市内女學校學資概要

校名	授業料	食料	舍費
女子大學	一ケ年廿七圓五十錢 一ケ年二十二圓	六圓	一圓
附屬高等女學校	二圓五十錢	六圓	五十錢
日本女學校	一圓八十錢	六圓以上七圓以下	一圓
青山女學院	一ケ年二十二圓	五圓內外	五十錢
明治女學校	二圓	六圓內外	一圓
實踐女學校	二圓五十錢	凡六圓	一圓五十錢
東京女子音樂體操學校	二圓	凡七圓	五十錢
三輪田高等女學校	但同校は寄宿舍にあらずして三輪田女史の家塾なり	七圓	一圓
跡見女學校	一年より二年迄一圓五十錢 三年より五年迄三圓	七圓五十錢	一圓
女子美術學校	曹通科二圓 高等科二圓	八圓	……
東洋女藝學校	五年迄十錢 高等科五十錢 專修科二圓 一圓五十錢 本科十錢	六圓	一圓
女子職業學校	同乙一ケ年甲二十七圓	七圓	一圓
女醫學校	一ケ年二十六圓	七圓	一圓
東京裁縫女學校	本科一圓 高等科二圓	約六圓	五十錢
和洋裁縫女學校	一圓以上六十錢	六圓五十錢（舍費共）	

幼兒の摸倣的遊戯

和田實

幼兒に摸倣の興味があると云ふこと及び夫れが幼兒の遊戯に盛んに表はれると云ふことは誰れも能く知つて居ることで今更云ふ迄もないでせう。夫れで從來兒童の間に行はれて居る此種の遊戯には何んなものがあるかと云ふと最も普通なものは種々の眞似遊びで、まゝ事、軍ごつこ、學校ごつこ、電車ごつこ、兵隊ごつこ、などが重なものであります。其他世間の事物を摸倣して喜んで居る有樣を一々數へ立てると數限りなく種類の多いものであります。そして此摸倣遊戯が少し進んで來ると多少演劇じみて來るものであります。始めは神樂の眞似などより起つて唱歌やお伽話の中の桃太郎を眞似て

「僕は桃太郎、君は犬になりよ、そして桃太郎ごつこしよう」など、、脳中の脚本を實地に演出する樣になるものです。從つて、摸倣遊戯には純粹に自分の觀察した所を單に摸倣するときと談話又は唱歌等で收得した物語などを想像して之を實地に表はす爲めにする演劇的のものとの二つに分類が出來る筈であります。而して幼兒教育には何れも決して惡くはない、或程度迄は何方も有益なものであると云はねばなりません。人によると芝居の眞似などを子供に遣らして怪しからぬと云ふけれども是は事と術とに因るので一概にけなすことは出來ません。夫れは成程純粹の芝居で遣つて居ることを其儘持つて來たのでは勿論害あつて益がない。併しながらお伽訓話に於て話された桃太郎を眞似て之を實際に演じたからとて何の害があらうか虎退治の話を聞いて加藤清正の眞似をして其英風を偲ばうと云ふに何の害があらうか否大に益があると云はねばなりません。何となれば是に因つて兒童は益其話に對する興味を深くし理解も

明瞭になり其話に因つて受くる感化も一層深くなるからであります。吾人は出來るならば幼兒教育に於て益盛んに之を遣らせて見たいと思ふのであります。尤も茲で注意しなければならないことは幼兒の遊ぶ此種の摸倣遊戯は彼の一派の人の主張する所謂お伽芝居などと全然同視することは出來ないと云ふことです。勿論幼兒の此興味は遂に發達してお伽芝居の樣に純粹の芝居となる其基礎には違ひないのですが、去りとて全然同視す可きものではありません。何故と云ふにお伽芝居と云ふものは元來が芝居として與へられたものですが、幼兒の此種の遊びは元々は決して脚本として與へられたのではなくて、唯幼兒が實際に見聞する所のものを材料として幼兒自ら發動的に且斷片的に行ふもので決して纏まつた首尾のある演劇ではないのであります。故に其遊戯の源泉となる可き摸倣の材料と云ふ樣なものも別段に供給することは要らないので幼兒自身が事物を觀察した所や又は談話の中から、自然に得て來るものであります。

然らば此種の遊戯は如何に誘導す可きかと云ふに一体幼兒が摸倣遊戯をやるのは、つまり一度觀察し得た結果を復元して喜んだり又は談話の結果を異なつた感覺に因つて再び經驗しようと云ふのであるから此再經驗に都合のよい方法を採つて遣ればよいのです。

之に就て第一に整へて遣らねばならないのは摸倣の標號となる可き補助物であります。例へば瀛車を見た後で瀛車を想像して樂しまうと云ふには兎に角其瀛車を代表す可き算盤であるとか積木であるとか云ふものがなければならぬ。之が即ち標號と稱す可きものであります。恩物と云ふのは其作業の結果は多く此標號として利用す可きものであります。其材料は大体過去の經驗中にあるものから採つて之を摸造させることが多いのであります。

其外に兒童の最も多く使用して居るものは棒であります。是は或時は鐵砲ともなり或時は刀劍となるし又或時は馬の代用ともなるので兵隊の眞似、競馬の眞似、巡査の眞似等種々の眞似遊びが出來るものであります。兒童の摸倣力が進歩すると俱に其視力などが進歩して來ると遊戯用の代表的物品も漸次精密に摸倣したものが欲しくなる樣になりますから此時期に達したらば實物を摸造した銃、劍、洋刀、の樣なものを與ふる必要が起つて來るし飯事の道具にしても石や貝殼の外に玩具屋にある玩具の茶碗や皿小鉢が一層興味ある樣になるのであります。尙一層摸倣力が進んで來ると單に其動作のみならず、深く其摸倣物の精神をも摸倣し樣とするもので、人物などならば其性格や風彩などをも表はさうとするものであります。例へば桃太郎になつたものは意氣軒昂あたりを風靡するかの如き顏色風彩を表するものであります。兒童が是程に發達して來て被摸倣物の性格を

種々に表示することが出來る樣になつたらば父兄は大に喜んで之を歡迎す可きもので此間に兒童が或理想の一方に牽引されて居ることを認めなければなりません。然るに何事ぞ世間には妄りに窮屈な偏固な教育說を振り回はして兒童に此種の遊戯を禁じ樣とするものがあるのは。誠に兒童の爲めに氣の毒なことゝ云はねばなりません殊に一般の幼稚園などでは頓と此方面に注意を向けないのは確かに幼兒教育の一欠點と云はねばなりません。之を家庭で遊んで居る子供に徵して考へて見るのに丁度此幼稚園時代の子供と云ふものは玩具屋にある摸造的玩具のわらゆるものを要する時期で盛んに此摸倣的遊戯を演ず可き時であります。然るに世人の考が漸次實用となり現實となつて徒らに想像的架空的の事を喜ばないで記憶を要するものや作業的結果のある者を重んずる故か、此種の遊戯は動もすると輕んぜられる樣で、會々兒童が神樂の眞似などして居ると馬鹿な遊びをさせて居

る樣に思ふ人がある樣です。從つて此種の遊戯に必要な彼假面と云ふものが近頃は餘り盛んに賣られて居らぬ樣ですが是は幼稚園などには是非欲しいものだと思ひます。

何故と云ふに幼稚園の樣な大人の多勢居る所では兒童は思ひ切つて素顏で此種の演劇じみた遊戯は遣り得ないものでもあるし且は素顏で大人の前で遣らして之を賞勵すると云ふことは多少眞面目な生活と想像的生活との間に存する區別を無視すると云ふ憂がありますが假面を用ゐれば此憂を除くと共に幼兒も思ひ切つて遊ぶことが出來ますからです。

要するに摸倣遊戯は幼稚園時代の兒童には最も盛んに發現す可き遊戯でありますから幼兒敎育上の主要なる保育事項として其取り扱ひ方は充分研究する價値のあるものに違ひありません。

從つて幼兒にまゝ事をさせる時には如何なる注意を要するか、兵隊ごつこ、軍ごつこ、電車ごつこ、等に就ては如何等實際誘導上に於ける種々の注意條項を見出すことは六ケ敷ない筈であります。私は會員諸君が斯る方面に於て御研究の結果を本誌上に發表せられんことを望みます。

▲精神を働せると鼻が高くなる

鼻の高い處の兩側は軟かな骨と筋肉とから出來てゐる、其筋肉は精神がよく働くにつれて強くなる、其結果鼻は高くなり美麗になる、子供の時の鼻は後に立派になる鼻でもヘコンだやうな低い鼻をしてゐる、悲しいとか嬉れしいとか物事を研究するとか或は考へるとか云ふ風に精神を働かせると其の爲に鼻は高くなる一人々々に就ては能く判らぬが、纏めて調べて見ると實際精神をよく働かす人の鼻は高い、そして美麗である　それは西洋の人の調べた物があつて精神の働きと鼻の形の良し惡しとは爭はれない關係がある『婦人衛生雜誌』

更衣に就て

新免義男

人の体温は通常攝氏卅七度位に常に一定して居まして身体の諸機能を保護致してるのは全く身体の温の發生と温の放散と相互ひに平均するからで之れを温の調節と申ます此調節か完全でなければ疾病を來すのでありますから甚大切なことでありますそれで人間の体温の發生と体温の放散する生理を御話申せば先つ神經系の媒介によりまして筋肉や腺器などに温を發生し皮膚や肺臓などが温を放散するのでありますの身体の安静なるとき又は饑餓のとき即ち温の發生少なき時は肺の運動心臓の運動は強盛とならずして皮膚の呼吸も中等度に蒼白く乾きまして体温の放散を減少致します消化作用即食物を攝取し又は筋の運動する時は温の發生が多くなりて呼吸及心臓運動は増加し皮膚呼吸も強く行はれて血色を増し發汗し温の放散を増して体温を得一度に保全しようとします又た氣温の昇降に對しても右の約束に違はず外氣か寒冷なる時は皮膚は蒼白くなり暖き衣服を着け温の放散を減じ且つ多食し勞働して体中の酸化化用が盛となれば温の放散を増加します若外氣が温暖なる時は皮膚は血色を増し發汗し輕き衣を着け温の放散を助け又食物を減じ安静に休憩して体中の酸化作用が減退すれば温の發生が減します如斯温の發生あれは次で温の放散ありて身体は巧妙に調節加減して体温を一定に保ち保護して吾人間は生活し居るのでありますの扨此巧妙なる体温保全作用を防害し疾病を招致するものは種々の原因がありますが尤も我々人間に多く來襲するものは不順なる四季の變化で即ち外氣温度風濕潤の度が急速なる變化を身体に受けるのでありますの如此き突飛なる變化は温調節作用は忠實に働きましても之に對して完全に調節するをは力に及ばず遂に寒暖不調

和の結果疾病となります今日此頃東京の如きは不順の天候多く日々の温度風雨濕氣の急速なる變化を身体に蒙らしするとは西國地方よりも多く從而更衣の順序不定にして真冒に罹るもの多く且つ續發症を來す危險も少なくありません殊に其風土に習慣せさるものは更衣には大に注意を要します昨日は寒く今日は暑く汗を拭ひ午前は單衣を着くるも午后は衣服を着けて火爐に親むか如き出没奇變なる天候に對し衣服を加減することは到底不可能てあります己に寒氣が身体を襲ふと感せし以上は已に寒に侵されたるものにして遲くあります故に變化に對して頻回衣を更むるとは却て有害無益であるから四季の變遷する不定の數十日間は更衣を謹み氣温定まるを待ちて后更衣すべきてあります又夜間睡眠の際は温調節の理に基き体温減退するものであるから一定の温を保ちて放散せさる爲被薄團の必要なる譯であります夏夜寝冷てふ寒冒に罹るを少からさるは之れが爲なり而して寒冒は只鼻カタル喉頭カタル氣管支のみならずロイマチス腸カタル膀胱カタル腎臓炎肋膜炎肺炎神經痛等の諸病をも發するものなれば等閑に附すべからざる事であります

斯く寒冒の豫防として述ふる時は寒暑共に更衣せざるが豫防なりと誤解すれば大變なり常に温袍に過くれば皮膚は菲弱となり却て寒冒に罹り易くなるものなれば皮膚は日々清潔に適度の刺戟を與へ例へは冷水の皮膚摩擦又は時季により水浴等をなし次に述べんとする着衣の注意要件を守り皮膚の營養を計ると其官能を盛にし抵抗力を貯をふべきであります

着衣の注意として　第一は襯衣即ち肌に接する衣類は木綿を佳良とす麻布は不良にして毛布も皮膚の薄弱なるものには不良なり小兒等に用ゐて發疹を生するをあり第二は衣類は清潔に輕く乾燥なるを要します濕潤せるものは寒冒に罹り易し第三は衣の制度生來習慣せさるものを着用する時は疾病

を來すをあり第四は温袍に過くれば發汗する而已ならず身体虚弱となり病に冒され易く輕きに過くるも同一なり哺乳兒は概して温袍を要します第五は衣服は狹きに過くべからず頸部狹くして緊搾せられば屢眼炎頸部の淋巴腺病を起し帶紐等を以て緊絞すれば呼吸や消化の障害を來し胸廓肝臓の畸形を發します靴の狹きは足の畸形鷄眼靴傷を生します第六は衣服の着色であります其色素の材料に注意せされば發疹中毒を來すをあり第七は帽は日光を避くるを目的とし重さを避け温袍を避くる必要とします以上の要件は更衣に就ての生理上の説話と密接の關係があるから兩者共に並行して實際に應用し健康を保ちたいものであります

▲婦人の盆栽（某夫人）

盆栽は婦人に最も適當した樂みであらうと私は思ひます、私の持てゐるのは金にしては何程の價値はありませぬが、自分で丹精したもの許りですから何だかう自分の子供でもあるやうに思はれます、或時は曲げて見、或時は水の分量を少くして見るといふ風に丸で子供でも教育するやうに色々やつて見ます、この棚の上の土許りの淺い鉢を御覽なさい、これは田の畔の土を取て參つたものです、そして毎朝水をやつて居るのです、春になつて參りますと種々な草が芽を出します、或は嫁菜或は紫雲英たんぽゝ、薊のでる事もあります、蓼の出る事もあります、或は又名も知れぬ草もあります、ドンな雜草でも此鉢の中に芽を出しますと人の搾へた以上な趣きがあつて得も云へぬゝいものです、

▲子供と廣告の繪

昨年の夏頃でした私の園兒が言ひ合はしたやうに黑の海軍帽を三つ四つ重ねて頭に載せ、胸を開いて藥はいらないかいりませんかと、賣り聲をまねて遊んで居ますから、何藥ですかと尋ねますと、胃活です、直ぐに風邪が直りますと答へました、これは胃活の廣告のシルクハットを被つて、燕尾服の胸の開いてゐるのを眞似てる事と分りました、其まね方の巧みなのには實に驚きました それも誰かに教へられたのではない、色々取調べましたか、僕はおとうさんの雜誌で見た僕は汽車の窓から見た、僕は藥屋にあるのを見たと云ふので全くの眞似でした、又或幼稚園では女の子が帶を前に結び羽織の襟をつき上げて後にすらし、左褄をとつて歩く遊びをするから、何の眞似かと問ふと、三越の廣告の姉さんですと答へた廣告の繪ははでゝ人目につき易いから丁度子供の思想に適して居る『明治の家庭』（廣告の繪が子供に及ぼす影響）

大陸的おさんドン

フランク

舞臺は廻りたり。わが名はフランク、吾はいまパブスト、カアヘイ、と云へるレストランドの一員となりて働きにゆくところである。曉の幕まだ開かれざるも、電燈畫の如きブロードウエーの第八街、流石の大通りも夢の衢のいとものの靜かに、無人の樓臺まさに是吾背景。

この寂莫の天地を車の音に破り來るはオークランドトレビユンの小賣係、馬は十字の道にとゞまるや否や、何處より掃きちらされし蜘蛛の子ぞ、バラバラとかけよる新聞賣の小僧たち、またゝくうちに各小脇にたばさみて、かなたにもこなたにも、モーネンペーパーの呼聲たかし。

吾等のレストランドの門口に、何日の間にか先んじて來て居るは、附錄のポンチ畫にありさうなる小僧、ねぼけたる眼に吾を客と見あやまりてか、モーネンペーパーとかけよりて、相識れる吾の笑ふのに　ショゲかへり、御早やう倭奴なとの憎まれ口、御早やう米奴よと横ツラ一つはりとばして、吾は扉を開いた。時計は六時に八分前、ハロー、フランク、御早やうと云ふはヘンレイと云ふ獨逸人、酒保人の小頭にて、五時より出勤して、自分の口をお客樣となし、御手前ものゝウキスキに、いつも今頃は上機嫌の男　不相異商賣御繁昌ですナアと吾は冷やかしてゐるうしろから、ハロー、フランクと手を握るはルイと云ふ澳太利人歴史の中には王者と同じき名をもちながら、これはまたいかなることぞ、髯むさぐるしく髮かきみだしたる一蒼夫、午前二時半よりこゝにつめかけて掃除萬端引きうけてゐる男　ことし五十七にて孫は二人、一人は四歳、一人は八ヶ月と十五日とか、前の日曜日に七くどく問はずがたりせしことがあつた。

急ぎわが身じまひの部屋にゆきて、上衣を脱しエプロンをつけ、かひがひしく腕環を引きしめ、かの酒保に出張した。六時を相圖につめかくる客、ヘンレイ荐りに怪辨を弄して、麥酒の賣方となつてゐる。わちらにもこちらにも、酒盃を合はす音ありと思ふまに、皆立ち去りて、殘るは吾とヘンレイのみである。

酒も呑み得ぬ意氣地なしのフランクよ。去つて庖厨にゆきミルクでもたらふく呑み來れとは、ヘンレイの挨拶である。厨夫長がこなくては、甘いものもあるまいがと、吾は悠々として庖厨の方に出かけて見る。

ヤー御早うとの日本語はY生と云へるわが友である。野菜方として働いてゐるのであるが、五時よりつめかけて、ストーブに火をたきつけ、朝の働する人々に、珈琲やミルクなどを暖めてくれて居るのだ。ア、いやだ。エー糞ッ、九弗だ、しかたがないとは、わが友の口癖である。一週間九弗の勞銀を得て居るからである。十一時間ばたらきのわがタイムも、ケチンのはとりにて、十五分位ノンキに減らされて仕舞ふ。

朝早くくる客といふは、何れクラブの小集に徹夜したとか、かるた遊びに眠るのを忘れたとか、曰くづきの連中のみであるから、さまで多く酒保にすがり居ることはないヘンレイは新聞など讀みて、余裕綽々と云ふ有樣、コックの來るのをまちかねて　貯肉室にかけつけ、もち來りし紅ひの一塊をストーブの上にならべ、こん畜生こん畜生、早く早くと、つッついてゐるのは、わがルイ老人である。ルイとヘンレイとは、客用のテーブルを圍みて且つ談じ且つ喫し　ゐるとき、吾は酒保にゆきて、わが仕事をはじむるのだ。

唯見る酒保の臺の上。酒はながれて泉の如く蒔きちらされしやうな數多の酒盃、これ等を拾ひわつめ洗ひきよむるはわが役目である。臺のうしろには同じ長さの臺ありて、二つの水溜もあり流下も

あり、中央には麥酒の送り管は美々しく裝置されて居る。

吾はとにかく臺上の酒盃をとりかたづけて長さ七間の臺を洗ひ去り、電燈の光りにこれを斜視して見る。まゝあちこちに班痕ある、あり合ふサイホンの口がねチョト押して、音いさましき曹達水を撒きちらし、更らに新らしきタオルを動かして塵もとゞめずと磨くのである。次に麥酒の送管を試み、どの管が盡きてゐるか、どの酒はまだ充ちてゐるか、ヘンレイに報告するのだ。かくてのちギャスリン仕立ての磨き粉にてその管五本の眞鍮を、鏡の如く光らすのである。管のほとりの臺上には穴多き眞鍮の板ありて、こぼれたるベアを洗して仕舞ふやうに出來てゐる。

これも磨かなくてはいけぬ。管の下はやはり眞鍮の受容臺、その下は氷函、その兩脇には銅壺ならびて、數十本の酒瓶は、氷のお燗いと冷かなりと云ふわけ、日本と丁度反對である。その銅壺の磨きかたもわが領分、加ふるに大なる水溜二つ、これも銅にて出來た因果には、日ごと日ごとに磨かなくてはならぬ。これは御丁寧なる磨き粉では間に合はぬ。硝子器を悉く洗ひ了りたるのち、外の種類の磨粉には水に粗刷毛、急がしくやッつけることにしてゐる。いかにあせりても磨きかたのみ三十分にてすまぬ。アヽ、この手が、この手がと、癪にさわつてたまらぬが、早仕舞しては光澤なく、光澤なければいとゞ癪だ。

ヘンレイはと見は、わがうしろにありて、姿見鏡を磨いてゐる。二間に五尺位の一枚もの、短身の彼は蹈み臺あふなげに、背を丸くして一生懸命だ。ながき冬の夜もそろそろ明けかけて、わが勞働の友どちはそれぞれ出勤した。八時二十分前までは、酒保の開放の有樣、ヘンレイ得意となりて、酒を振舞ふてゐる。人心を收攬するはまさにこの時と云ふ顏つき、支配人の來るまでは、ヘンレイの氣宇王侯の如しである。

廚夫長チャーレイ莞爾としてやつてきた。まづ一杯とグラスをつきつけしヘンレイ、今日は支配人のくるに間もない。早く早くと促がすのである。忙はしく汲み乾して、出勤簿に署名せるチャーレイ、更らに一杯のウヰスキーを請求するのである例のことゝて笑つてその杯に充たしてやると、名殘惜しさうにして酒盃を臺の上にのこし、白衣白帽のコックのすがたとなりて來る。更らに改めて一杯と云ふとき、咳一咳入り來るは支配人キャッスルである。チャーレイはいつの間にか去つて見へず。

キャッスルも獨逸人である。余は彼を曹孟德と字名してゐる。稚き時見たる三國誌、その北齋の筆の面影によく似てゐるからである。豪傑肌の男にて、その禿頭とその眼光とその破鐘のやうな聲とは、一種の威嚴を添へる。ヘンレイはもはや酒の接待は出來ぬ。吾を扶けてグラスを拭ふてゐる。大小の酒盃、その種類のみにても五十余、その數二千個を下らず、一時間ばかりのうちにこれを悉く拭ひ、それぞれの棚に安排し、酒瓶の棚の塵を拂ひて支配人の檢査を待つてゐる。帳場を開き、金庫を開き、計算器を整理してのち、支配人は酒保に來り、今日賣りいだすべき酒の目錄を書きて余に渡すは常、八時後に余は楷下の倉庫係より一々これを受とつて來ねばならぬ。

酒保の飾りづけも余の役目である。この國の食品は滋養を主としてゐるためか、日本のやうな見て麗はしさは少ない。しかし飲料は中々美しい。硝子瓶の形いろいろなるさへもの珍らしきに、琥珀の色、瑪瑙の液、何れも玲瓏透徹見るからに氣もちがよい。草頭の露ほども呑むなどの佛戒の重ければ、吾は點滴も舌に上ぼしたることなけれど、意匠を競ふペーパーと、精製を誇る酒の色にはいつもうれしき想ひした。味をつけるための香料と糖液にも、いろいろありて、瑠璃のやうなるあり晴れたる空の如し藍色濃かさあり、眞紅の寶石を

とかしたるにあらざるかと疑はるゝあり、若草の色そのまゝなるあり、菜の花の黄金色にもさも似たるあり、丁子の香、回香の匂ひ、各種の菓汁の香と交りて、室にたゞよふ酒精の雲、洋々として人を酔はさずんばやまずとの慨、加ふるに礦泉水の幾種、曹達水の二三種、下戸の足をも留むるに足る。吾は密漬の櫻實に紅ひ鮮かなをとりいだし、玻璃に鍍金せる器に盛り、臺上二三ヶ所にならべ、配するにオリープの綠眼もわやなるを以てし、スプーンの銀樹をその間に植え、橙、檸檬のスライスをところどころに山を築き、東洋流の熱酒を好むものゝためには、ギャスの火上に銀器、湯をたぎらし、松風の音つねに絶へず、卵したての杜松酒あり、ラム酒あり、望みに從つて汝の枯腸を潤ふさん、來れ、天下の酔餓鬼まで、八時と共に吾は酒保を去るのである。

段をくだりて倉庫にゆけば、メローと云へる肥大漢、シガーをくばへて悠々椅子に座してゐる。吾は支配人の命をつたへて、各種の酒を請求すれど、中々に立ちわからぬ。マア急がずともよい、話せ話せとノンキなもの、吾はかれを董卓と字名してゐる。中々の横着もの、出來るかぎりは手足を動かさぬやうにしてゐる。

口だけは中々よく働く。ラランク、君は見たところ力もありさうもない。學生だらふ。甘くあたつたか。苟も讀書する位ならフレンチが出來なくてどうする、わしを見なさい、本國のジャマンは云ふまでもなく、伊太利は出來る、英語はこの通り、ことにフレンチは大得意だ、ぞチット教へてやらうか。余は云ふ。だまれ。隣國の言葉位に通ぜぬ阿呆はどこにあるか、私だとて、支那語と朝鮮語とは御手のものサ、きゝ玉へと、史記の滑稽傳の一條を朗讀し、これが支那語サ、それからと、蒙求の標題を棒讀みにしてきかせ、これが朝鮮語、どうだ恐れ入つたかと、彼呆然、爾後フレンチを說かざること久し。

酒保と倉庫との間に電話線を通じてゐるので、フランクフランクとヘンレイの聲　君はまだその肥大漢の駄法螺を拜聽してゐたのだらふ、早くもッて來てくれなくてはこまるよと、オーライ、よしきたと、それからは大汗になりて十回ばかり楷段を上下するわけ、時計は八時半を過ぎてゐる。南無三寶、今日は少し遲いぞと自ら叱りとばして、急ぎ用意するはおさんの武器、雜巾とバケッそれにて食堂を掃持をするのだ。酒保を角にして廣く展開した椅子テーブルの散兵線吾は飛ぶが如く驅け廻りて拭ひ淨むるのである。こゝは並等のお客樣のために設けたところ、外に紳士むきの一室はある。通りみちをへだてゞ酒保と對してゐるこゝには獨逸風の獵具、喇叭、陣がさ、剝製の鹿、古武器、舊式の銃など飾りつけてある。外に一寸と密談でもしながらバクッかうと云ふ商人輩のために狹き三個のルームがある。これでお仕舞かと思へば中々さうではない。酒保のうしろには前記

の總坪位の大食堂がのさばつてゐる。正面には奏樂機械は据えつけられて、電氣作用にて隨時にきくことが出來る。蓄音機寫聲器のやうな小さな音ではない。劇場のと少しもかはらぬ。合奏の鳴ものは十余種位もあるだらふ。一曲ごとに紙腔琴のやうに譜の卷紙を挿入するやうに出來てゐる。入口らケッチンまで隈なく響くのである。屋内の柱ごとにお賽錢の函を供へ、誰れにてもあれニコル一ッをそれに投ずるを、合奏がはじまるのだ。こゝには造花あり彫像ありオイルカーットは床の上に百花をちらし、ギャスと電燈と天井に幾多の月輪を懸く、こゝは抑も誰れのために設けたるところぞ、ふるアメリカの高等人種、髮ながくして智惠短かく、裳のながきは氣の短かきに反比例と云ふ、說明むつかしき女性と云へるもののために設備し奉りてあるので、今フランクはその椅子テーブルを拂拭し奉つてゐるのだ。

雪子と墨子

春潮漁史

昔し或る處に二人の娘が居りました。姉を雪子と云つて妹を墨子と申しましたが名前の通り姉の雪子は天性誠に美麗で心も至つて優しう御座いましたが妹の墨子は顔は醜く心も屈がつてゐ居ました。

其上墨子は毎日御馳走を食べたり美しい衣服を着たりして面白く遊んてばかり居ましたが、雪子は年中不淨た着物を着て朝から晩まで御臺所で下女の樣に働いて少し暇な時には御臺所の隅で糸を績いで一寸の遊ぶ暇さへなく働きまして誠に孝行な娘でありました。

今日も朝から御臺所の事をしてしまつて少し手があきましたから常の通り糸を績ぎ初めました。余り一生懸命に績いだので手から血が出て糸卷を眞赤に染めましたので、之れを洗ふと思つて井戸端へ來ましたが折り惡しく小石につまずいて糸卷を井戸の底へ落してしまいました。所が其糸卷は墨子のですから驚いて墨子の處に行きまして、今の出來事を殘らず話して罪を恕して下さいとあやまりましたが、「御免なさいよ、其代りに私のを上げるから」と云ふと

墨子は大層腹を立て、聲も荒々しく

「糸卷を落したのなら早く拾つて來て下さいよ、姉さんあやまつたからつて、糸卷は歸つて來ません」と無理な事を云ひました。

そこで雪子は困りきつて井戸端へ歸つて來ましたが、女の身で之の恐しい眞暗な深い井戸へは如何にしてもはいれません種々と考へましたが、他によい手段もありませんので、ふるえながら井戸へはいりましたが次第に呼吸が塞る樣な心持ちがしてとう〳〵氣が遠くなつてしまいました。

雪子が正氣付いた時には美しい花が一面に吹き亂れて居る野原の眞中に立つて居りました。余り面白い景色なので蝶々などを追ながら進んで行きますと大きな林檎の木が眞赤に熟して枝も折れるばかりに實を付け居りました。雪子の通るのを見て

「モシ雪子さん私達に二三日も前から熟しきつて居るのですから此の木を振つて落して下さい」

とたのみますので力い有る限り木を振つて林檎を皆んな落してやりまして又歩き初めました。すると行く手に小さな見苦しい家が一軒立つて居りましたのでそこへ進んで行きますと家の内から白い牙を持つて居る見るから恐しいお婆さんが顏を出して見て居ましたので雪子は驚いて逃げ樣としますと、お婆さんはそれを止めて、

「そんなに恐はがらないでもいゝお前が骨身を惜まず一年間妾しの處で働けば、糸卷を返して上げ

るし又お前が持てる丈けの金貨を與げ樣」
と云はれましたので雪子は之のお婆樣の所で一年間働くことになりました。
翌朝から雪子は早く起き御臺所の事から御座敷から廣お庭まで淸らかに掃除して、お婆樣が用を命しますと嬉んで早く用をたしますので大層調方がられて、種々の御馳走や、美麗な衣服を呉れましたので家に居るよりか餘程幸福な日を送つて居りました。
月日の過ぎるのは早いもので最早や雪子が來てから一年になりましたので、或時お婆さんは雪子を部屋に呼んで、
「お前は一年間よく神妙に働いて呉れましたから約束通り糸卷を返して上げます、又之れはお前が勉强であつた報酬です」
と云ひながら金貨で滿ちて居る大きな囊を呉れました、その上に美事な帽子や衣服や靴を與へられましたので喜び勇んで家へ歸つて參りました。

家中の人達は居なくなつた雪子が立派なお姫樣になつて歸へつて來ましたので大變に驚いて立派になつた雪子を取り圍つて何をした事だと尋ねました。そこで、雪子は今迄あつた事を一つ殘さず話して聞かせて墨子に糸卷を返しました
此話を聞いた墨子は急に羨ましくなつて
「それぢや、私も行つて來ようや」と自分で自分の糸卷を井戸の中へ投げ入れてそして自分で井戸の中へ入つて行きました。
やがて墨子が目を開きますと姉に聞た通りの花野原に出ましたからやたらに花を折つたりむしつたりして行きますと、前に林檎の木が眞紅に熟して居る實を枝が折れる樣につけて居ましたが、今墨子の通るのを見て、
「若し墨子さん木を振つて下さい私達はもう此間からもう熟しきつて居るのですから」
とたのみましたが墨子は頸を横に振つて
「私しにそんな骨の折れるが事が出來るものです

か」

と頭をそむけて行き過ぎてしまゐました、そをこをして居る内に漸く姉に聞たお婆さんの住家まで來ました。時にお婆さんは前と同樣に窓から頸を出して居ましたから墨子は之れが姉樣に聞たお婆樣だと氣がついて其の前に進み寄つて少しも恐れずに當分妾しを使ふて下さいと請ふて之の家へ住みこみました。

翌日は勞かれて居るにもかゝはらず太陽の出ない中から起きて一生懸命で働きました。此れは自分も姉樣と同じ樣に澤山の金貨を得ようと思ふのでいや〳〵ながら務めたのでした、然しそれも永くは續かず二日目にはそろ〳〵惰け出しまして三日目には太陽が窓を照しても起き樣とせずお婆に起されて無性々々に起きました、四日五日と日を經る度に本性を表して來ましたからお婆樣もあきれて七日目には暇をやると云ひ出しました。然し墨子は大變嬉んで姉樣と同じ樣に金貨や衣服がもらへると思つて居りました、所がお婆樣は大きなコールタの箱を持つて來て墨子の頭から浴せかけまして、

「之れがお前が七日働た報酬です」

と云ふて消えてしまいました。そこで墨子は泣く泣く家へ歸つて來ましたが、たゞでさい黑い墨子はコールタの爲めに印度の黑奴の樣になつてしまいましたので近所の村人に誰れ一人墨子をお嫁にと云ふ者がありませんでしたが。姉の雪子の方は村の中に大評判となりまして方々からお嫁に下さいと云ふ人が澤山ある樣になりました。

金魚のお話

會員　よ　し　子

ある處に太郎と云ふ可愛らしいすなほな子供がありました。毎日幼稚園に通つて居りましたが大變

えらい子供で、雨が降つても風が吹いても、暑くても寒くてもまだ一日もおやすみしたことはございません。

ある夏の日の事、太郎は今しも幼稚園から歸つて來て

太郎「母様、只今！」

とお辭儀を濟して、暑さに上氣した顏のほこりを涼風に吹かせ様と思つてお椽側に出て來ました。暫く涼んで居る中にそこら見廻はすと、先づ目についたのはそこにあつた大きな水鉢です。是は太郎の大好な金魚鉢なので。此間お父様が太郎に買つて下さつたのです。太郎は何の氣なしに鉢の中を見ると丸つ子や三つ尾の美しいのが、然も涼しさうに泳いで居ますから、急に水を思ひ出して、

太郎「金魚は嘸ぞ心持がよいだらうなア、僕も金魚の様に始終裸かで居たいなア、着物なんか暑くて仕方がないやア」獨り言を云ひますと一番大きな三つ尾の赤がズーット水の上に浮いて來て大きな口を出して、

金魚「坊ちやん〳〵、私供は決して裸かなぞになりはしませんよ、始終着物を着て居ますよ」、と不意に話し掛けたので太郎は吃驚して飛び上りました。そして

太郎「ア、、吃驚した。何んだつて、いきなりそんな大きな聲を出すんだね。お前着物を着て居るつて？何んな着物さ、着物なんぞありやアしないヂヤないか？」と云ひますと

金魚「坊ちやん、私の着物が見えませんか、是れ此通り、鱗と云ふ美麗な着物があるぢやありませんか」

太郎「成る程そうか」、と云ひながら能く〳〵金魚の顏を見ると耳がありませんから、太郎は不思議に思ひまして

太郎「オイ金魚さん、君には耳がないね、それで能く聞えるね」、

金魚「じやうだん云つてはいけませんよ坊ちやん、

有りますともね、能く見て下さい。小さい穴があるでせう、それが私の耳ですよ」、と云ひますので能く見ますと

太郎「アヽ、在つた〳〵、口の直ぐ上の處に、けれど可笑しいな、君の耳は口の上にあるのだね」

金魚「坊ちやん、困りますね、そんな探し方では、口の上に耳なんぞがあるものですか、それは矢張り鼻の穴ですよ。そして耳の穴はもつと上の方にありますよ。能く見て下さい。

太郎「モット上の方？、アヽ、なる程あつた〳〵、あんまり小さいので解らなかつた。是が耳かね！成る程小さな穴だなア、」

金魚「小さくつたつて聞くに違ひはありませんからネー、坊ちやんの樣につんぼの早耳などはしませんよ」

太郎「是は失敬な事を云ふ、何時僕がつんぼの早耳をしたえ」と怒り掛けましたので金魚は早速閉口して

金魚「是はドウモ失禮致しました、御免下さい、時に坊ちやん、此間の遠足は面白う御座いましたか今度行らしつたら亦棒振の御土產澤山御願ひ致します」、

太郎「アヽ、亦取つて來て遣らうね、お前棒振大變好きだね」

金魚「エヽ、何より結構ですもの、それに此間の樣な赤のなどは尙更甘いですからね」、

此時太郎は金魚の尾のフワ〳〵と動ひて居る處を見て居ましたがフト金魚の足のないのに氣が着いて

太郎「アヽラ、可笑しいな、金魚には足がないよ、蛙だつて足があるのに金魚にはないよ、お前ソレデ能く歩るけるねー」

金魚「ソレハ貴君、私には蛙の樣な足はありませんさ、けれど蛙の足よりも、坊ちやんの足よりも丈夫な、そして水の中では都合のよい足を持つて居ますよ、是れ御覽なさい、此美麗な尾を、然も三

つありますよ、坊ちやんよりも一つ多いでせう、蛙に比べても多いでせう、夫れに此尾の都合のいゝことは是で水をかくと何方へでも自由に早く曲れますからねー、何があつたつても突かる樣な煩間なことはしませんよ、蛙なぞ御覽なさい、こんな水鉢などへ入れると始終突かつてばかり居ますよ。

太郎「成る程夫れはそーだね、夫れにしてはお前は能く轉んだり、ひつくり返つたりしないね」。

金魚「ソレハ貴君私の背中と腹とにひれと云ふものがありませう？、是れがありますから倒れないのです。

太郎「ソーかね、中々甘く出來てるね」と云ふトタンに水鉢の縁に突いて居た太郎の手がポンと端れて縁側へドンと落ちたので金魚は吃驚仰天、ビシヤと波を打たせて鉢の底へ沈んで行きました。暫くして居る中に水が靜かになつたので三つ尾は亦上の方へ浮いて來ました。

太郎「金魚君、何をそんなに驚くんだよ、僕が一寸手を落しただけだのに？」

金魚「アヽ、吃驚しました。私は又大地震でも起つたのかと思ひましたので驚いて沈んだのです」。

太郎「金魚君、君は水の底にくゞるのが上手だね、そして何時迄も沈んで居られる樣だね」。

金魚「ソーデス、私は何時迄も沈んで居られます そして底の處を方々自由に泳いで歩けますよ、蛙なぞにはこんなことは出來ませんからね」。

太郎「何うして、そんなに勝手に沈んだり、浮いたりすることが出來るんだねー、僕にも敎へて呉れないか」

金魚「ソレハ敎へて上げたいのは山々ですがね、此ればかりは敎へられないのです、何故と云ふに私は善いものを持つて居るんですもの」

太郎「ソレ何さ、僕にも呉れないか」

金魚「ソーデスネ、折角ですが是ばかりは上げられませんよ、ソレデモ私のお腹の中にあるんですも

の上げ様ものなら私は死んでしまいますからね、ソレハネ、浮き袋といつて空氣の入つた大きな袋です、そして此袋を大きく膨らますと上に浮くことが出來、小さく縮めると沈むことが出來るのです、是れは私の生れた時から神様が付けて下さつたので唯つた一つきりしかないのです」。

太郎「ソレハ善いものを持つて居るのだね、僕もそれを欲しいな。其浮き袋と尾と鰭とあれば僕も金魚の様に水の中が泳げるんだね。

金魚「イーエ、ソーは行きません、まだ、も一つ足りないものがありますよ、あなたはまだ御存じないかも知れませんがね、あなたは始終呼吸をなさるでせう、水の中でソレが出來ますか」と云はれて太郎は閉口して

太郎「成る程、是は困つたね水の中では、呼吸が出來ないや、呼吸をしなければ死んでしまふは……アヽ、いーな君は呼吸をしないでも生きて居れるんだね」。

金魚「イーエ、そんなことはありませんよ、私だつて生きて居ますもの、矢張り始終呼吸をして居ますよ」、

太郎「アヽソーカ、それぢや、判つた、時々水の上に口を出してアップ〳〵するのはアレ呼吸して居るのだね」

金「イーエ、そーでもないのです、私は別に水の中で呼吸の出來るものを持つて居るのですよ。ソレハネ、私の顎の處にエラと云ふ櫛の様なものがあるでせう、此が在れば水の中で呼吸が出來ますが是がないものは駄目です、ナント善いものを持つて居るでせう」、

と金魚は高くもない鼻の穴をビヨコつかせて高慢話を致しました。此時丁度お父様のお歸りと見えて玄關でお父様の笑聲がしましたので太郎は勢ひよく起ち上つたので水鉢が搖れて水が波立ち金魚は驚いて水の底に沈んで行きました。

雜錄

●女子教育と愛嬌

愛嬌といふことが心理學上からいへば快活なる發表を以て人に愉快を與へる一種の德であつて半は各個人の眞賦に由ることである。それゆえ何人にも同樣に愛嬌を得しめるといふことは出來ぬのであらうが併し教育の仕方によつては確かに或る點までは天眞爛漫の美はしい發表をなすことが出來るやうになるのである。試みに今日の女學生を見よ十七八の娘盛りにして昔なら一家に客があつても母親を助けて切つてまはすほどの働きをなし狹い家庭の社交に於て女王の位置を占むべきものが、やれ男女交際のやれ女禮式のやれ常識の修養のとやかましくいふ今日に於て多くは木偶の如くに他の人に接し知己朋友の間に於ても何等の愛嬌なく人をして却て不愉快の感を發せしめるものさえあるのはまるに女子の特色を沒却したる教育法ではないか。

例へば學校でばかり育つたものは老人が來ても之を勞はることを知らぬ。杖を出すことも履物をそろへることも知らぬお爽かつたでせうとかお暑でせうとか乃至はお危險うございますとさへ言ひ得ぬ。是れ彼等がぼんくらにして全く氣のつかざるではなく假令心には思つても適當に臨表することをなし得ぬのである。婦人の笑顏は一家は勿論一の社交團體に平和と歡樂とを持ち來すべき大切なるものであるのに此の有力なる武器を活用し得ぬやうな教育をなして何にかなる事か。吾等は今日の女子に望むにはのんびりした心持ちと極めて常識に富んだ知識とよく發育したる身體とを養ふことである。愛嬌も強いて作れば賣笑の婦の如くになるそれてさへ男子は所謂淑女よりも之を喜ぶ傾があるではないか。かういへば女子の肩を持つものは直ちにそれは男子の理想が卑いからでもあるといふであらうかたとひいくら理想の高い人でも笑つて損をしたといふやうな婦人を喜ぶものではない。要するに愛嬌といふことは一種の美德であるから男女ともに必要であるが女子は從來の分業的發達の上から特に一層の必要と感ずるのである。終に臨んで一言しておくが眞の愛嬌は決して人の威嚴と兩立せぬものではない。快活な言行をなして人に愉快を與へたからというて決して其の人に對する尊敬心が減却せられるものではない。昔から貞女とか淑女とかいふものが夫に離はれ不幸に終はるのは形式一偏理窟一偏で少しも夫をチヤームする愛嬌がないからである。今日の高等女學校以上の教育者は下らぬ取締りなとに心を腐らすよりも愛嬌養成法でも研究したらよからう。（兒童研究）

●子供を罵るまじきこと

凡そ人を罵ることの惡いことは誰も知つて居ることでありますが我子でも決して罵るべきものではありません。人は幾ら子供でも、小くても皆人格を有つて居りますし、それに筋を言うて聞かせれば、解るものですから、子供が惡いことをしても、一概に罵るのは甚だよろしくありません。子供でも魂がありますから、假令親からでも罵られては、よい心持は致しませんので、却て反抗する氣味がありますから、懲らす目的を達することが出來ませんのです。勿論子供が惡いことをしますれは、そのわざとしたのと過ちと

に拘はらず、相當に叱らなくてはなりません。過ちなり、悪いことなりは、唯説き諭すばかりでなく、叱つて懲らすことが必要でありますが、罵ることはいけません。若し少しも叱りませんで、何時も説き諭すのみでは、子供を戒める力が足りませんで、善悪の觀念が判然とならせない恐れがありますから、悪るかつたら十分に叱らなくてはなりませんが、罵ることだけは無用です。子供が何をして居つても若し親から、それはいけませんと言はれますと、必やめます十五六以上の男の子でも、父親から、いけませんと鋭く強く一聲言はれたらば、屹度止めます。若しそれでも止めぬならば、それは平生からして、親の威が足りぬので、此の場合を罵つたとて、一向無益です。既に制止の聲を用えれば足りるものを、初から、馬鹿だの、間抜だの、此の野郎だのと罵るのは、却て親の威を輕くするので、子をして不從順ならしめる本であります。小さい子供でも、矢張理性と感情を有つて居りますから、假令親からでも罵られると、不快を感じまして、心中悅服しませんし、それが甚しくなれば親を有難く思はぬやうになります。かつ父子供自身の自重心を減じましたり、品格を傷けましたり、百弊あつて一利ないと思ひます。子供が如何にも横着に悪い事などします腹の立つのは、自然ですから致し方ありませんが、罵ることだけは是非お差換へあつて然るべしと思ひます。いや、是れは人樣に向つて申すではございませんが、私自身大に愼むべきことと思ふのでございます。（兒童研究）

●保姆養成所生徒募集　東京一つ橋なる同所にては第五回の養成講義を來る六月中旬より開始するよしにて目下生徒募集中なり、小學者資格は高等小學校卒業以上にて卒業は六ヶ月定なりと云ふ。

新刊紹介

●造花獨けいこ　本書は近時流行の造花術を最も平易に説明したもので數百の挿畫は充分に此書の目的を達することが出來るだらうと思ふ。地方に居つて師を得るに困難な人には此上ないものである尙器用な人ならば是れ以上幾らでも熟達することできるであらう。（發行所牛込區納戸町六番地　明治家庭社　定價五十錢）

●子供芝居　お伽芝居川上音次郎に因つて皮を切られてから兒童を慰樂するの目的で此種の演劇が所々に行はれる樣になつた結果は遂に兒童をして之を演ぜじめ樣とするに至つた。本書は此要求に應じて數種の面白き脚本を供給したのである。脚本中にはあまり藝成しがたいものであるが大体に於て頗る時好に適したものと云ふことが出來る。（發行所神田表神保町二番地　彩雲閣　定價貳拾錢）

編輯記事

本號に收めたお伽話の魚の話の中耳の所は少し事實に相違して居りますから之を實際に用ゐる方は心して少し御訂正あらんことを望みます。

會費領收（自明治四十年四月二十三日至同五月二十二日）

金額	年月日	姓名
一二〇	四〇、二	谷斯文
一〇〇	四一、一	森乙女
四〇、七	四一、四	下田次郎
三〇	四〇、三	森岩太郎
三〇	四〇、一	寺島とみ
一〇〇	四〇、三	酒井静
一二〇	四〇、四	齊藤もと子
一二〇	四一、三	山川二葉
六〇	四〇、七	平山久
一二〇	四〇、一二	谷田部順
三〇	四一、四	沖縄首里區役所
一二〇	四〇、五	鹽野吉兵衛
六〇	四〇、一	太田捨
四〇	四〇、一〇	柳川あい
九〇	四〇、五	上野喜太郎
一五〇	四〇、八	安東テイ
一五〇	三九、七	山口まさ
一二〇	四〇、九	前田新子
一〇〇	四〇、一	森田なほ子
一二〇	四〇、五	近藤しげ
八〇	四一、一二	渡邊ひで
六〇	四〇、一二	坂出幼稚園
五〇	四〇、一〇	福島とみ
一二〇	四〇、五	石井しけ
二〇〇	四〇、一	坪内喜久
	四〇、一二	
	四〇、八	
	三九、一一	

金額	年月日	姓名
二〇〇	三九、一	遠藤しづ
一〇	四〇、五	澁谷あき
一〇	四〇、五	鈴木まさ
五〇	四〇、五	福田ゆき
一〇	四〇、九	市原次惠
一二〇	四〇、一	大西益子
五〇	四〇、一	上野賀久
六〇	四〇、一	淺羽静枝
六〇	四〇、一	高橋しげ
一二〇	四〇、四	村尾まさ
一二〇	四〇、四	樋口イク
六〇	四〇、一	中田リキ
一〇〇	四〇、一	菊池教世
八〇	四〇、五	大内成
一四〇	三九、二	伊藤みち
三〇	四〇、五	山崎露子
五〇	四〇、一	平岩繁治
六〇	四〇、一	小林ふぢ
一二〇	三九、一一	井上杏憲
一五〇	四〇、一	中川きくえ
四〇	四〇、五	松枝きく
一二〇	四〇、一	阿部純
一〇〇	四〇、一	池永ゆき
一五〇	三九、四	森本タミ
一二〇	四〇、一	杉野四男次郎

●御注文の節は（婦人と子供）を見たる旨御附記を乞●

高等女學講義

會長伯爵夫人烏丸操子

毎月二回發行一ヶ年半卒業月謝四十錢東修三十錢

●皆さん!!!! 女でもこれからは學問がなくてはなりませぬ

▼本會は近頃の講義錄が餘り亂暴な行爲を致しますから其弊を防ぐ爲に成立つたものであります

▼本會は全國の教育家の贊助により眞面目なる教育家の企圖になつたものです

▼本會の講義は皆さんが自宅で獨習の出來るよーエ夫をこらして丁寧に講義してあります

▼本會卒業生は貸費生其他の持待があります

見本一冊二十五錢規則進呈

振替貯金口座壹壹壹壹壹壹番

修身	擔任講師 東京高等女學校教諭
國語	東京高等師範教授
習字	東京高等師範教授
算術	東京高等女學校教諭
同歷史	東京高等師範教授
同圖畫	東京府高等女學校教師
同英語	東京府高等女學校教師
同地理	女子高等師範講師
同理科	正則英語學校教諭
同家事	早稲田中學校教師
同裁縫	本會主幹
同花湯挿花	女子高等師範教諭
女子實業	東京高等女學校教諭
女禮式	高等家政學校教授主任
	女子高等師範學校教授
	女子高等師範教諭
	同校訓導
	日本女子大學講師
	東京弘文學院教師
	日本婦人正風會長

吉田源三郎	市川彌平
岩田鶴皐	生駒萬吉
稲垣作太郎	峰岸米藏
依田豐	森白甫
小田常通	池田夏敏
牧口茂三郎	竹島勉
森川すみ子	塚本はま子
宮川ちよ子	吉村千鶴子
市橋なみ子	兒島文茂
金島太仁作	中島義弐

●本會に入ればお錢がかからないで、家に居乍ら、女學校に居ると同樣の學力がつきます

家庭雜誌 大家庭 の大王

定價一冊金七錢郵稅金五厘六冊前金四十錢　十二冊前金八十錢

△材料豐富にして記事清新家庭の讀物の上乘なるは多言を要せず

第二卷第三號一月廿五日發行

第二卷第四號二月廿五日發行

前付の一

大日本高等女學會　東京市小石川區安藤坂區役所前

●御注文の節は(婦人と子供)を見たる旨御附記を乞ふ●

心理學の王冠

新刊

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 元良勇次郎先生新著(五月一日發賣)

心理學概論

洋裝菊判全一冊
紙數凡三百餘頁
定價凡金一圓
郵稅金十錢

心理學上に於ける博士の位置は世既に定評あり。爰に喋々を要せず、本書は、博士が、彼の宏大深甚の學殖を提げて、昨年更に歐米諸洲を漫遊し齎らされたる泰西名家の學說と、博士が多年造詣せる新研究とを悉く網羅されたる大著なり、行文頗る平易にして簡明世の心理學に通曉せんと欲する士及び教育文學宗教界に立つの士は必ず本書無かる可からざる也

文章平易

發行所 東京神田猿樂町貳番地 弘道館

●御注文の節は(婦人と子供)を見たる旨御附記を乞ふ●

東京高等師範學校教授
東京帝國大學助教授
文學士 保科孝一先生著

言語學講話

大修正第三版發賣

（購求者は修正の版に注意せよ）

國語教育の發達を促し國語問題の解決を速ならしめんには言語學の普及を以て要諦とすべきや論を俟たず保科先生特に茲に見るところあり本書を著して言語の一斑を平易に且つ懇切に說明せらるゝ中等教育に從事せらるゝ諸君は勿論言語に關する原理を學んで斯の道に貢献するところあらんとせらるゝ諸君は教科書又參考書として缺くべからざる良書なり殊に今や三たび版を改むるに當り丁寧に增補修正を加へられたれば一層得る處あるべし

洋裝菊判總クロース
全一冊正價八十五錢
郵稅金八錢

文學士 遠藤隆吉先生新著（大好評嘖々）

虛無恬談主義

菊判形全一冊
正價金四拾錢

本書は處世法上の心得なり。政治家官吏商工業家等凡て多くの人を對手にする者の必讀の書たり。大政治家たり大事業家たり、大教育家たらんとするものは必ず、此心得なかる可からず、虛無恬談主義の創設者たる老子は支那に在りては一小吏に過ぎず、而かも其名孔子と竝びて盛んなり而して虛無恬談主義は貴人の學なりと稱せらる實に之を學はば貴人たり大人物たるを得るなり本書は無能の無能爲の爲を主張する者にして尤然たる大政治家大日大効名をなすの素地を作すを得べきなり。

發兌 東京猿樂町神田二番區 弘道館

大賣捌 東京尾張町 京橋一 隆文館

●御注文の節は(婦人と子供)を見たる旨御附記を乞ふ●

▼注文の時爲替料も書留料も入らないで至極安心なる便法あり何れの郵便局にても叮嚀に敎へます

三卷第六號一月號
六號一冊六錢半年三十三錢見本三錢

明治の家庭

▲子をほめる親に若かず……文學士 松島成三
▲月收拾八圓の家政苦心談……關根熊子
▲主人に秘密なきを望む妻君につき百說……金太郎
▲我儘なる妻君の直し方……佐治實然
▲子供の育て方(質問隨意、應答親切)……
▲模範の主婦大下そみ子……梓柳子

▲家庭敎育に熱心なる奧樣の觀察法……野口英子
▲私の今日此頃……岩林喜夫
▲雜誌治療で恐しき流產……坂本病院長
▲村はづれ(懸賞一等)……海村あそ子
▲よろづ問答(瑜問百出、智識寶庫)……
▲奧樣倶樂部▲可愛い話は本誌の娛樂場來て遊べよ

家庭敎育に付て生たる材料を持つ者本誌に勝なる子供を親は必ず讀め半年わづかに三拾三錢です

毎號懸賞募集 應用料理で眞においしいご馳走天狗 献立問答

新式造花獨習

日本造花研究會著
鮮明なる畫三百餘個を挿入す
製本頗る美麗机上の飾となる
定價五拾錢 郵稅六錢
大好評 實に大好評
初版二週間にて忽ち賣盡し再版出來

特色 女中が校閲 無學の女中さへ本書によりて容易に美麗なる花を造くり得
▲造花は大流行 ◉本書は三百の畫を以て平易に親切に說明し尙實物標本を分與す
標本を分與 初心者には造り上げた花と各材料の實物標本とを上げます
材料は少し 材料は求め易く造り易く費用も容易に熟達し得らる
道具は不用 最初の適具一組は僅か三十五錢で揃ふ定價表は書中にあり
初心者も容易に熟達

發賣元 東京日本橋區本石町三 寶文館

發行所 東京牛込納戸町六 明治の家庭社

（婦人と子ども第七卷第六號）
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可　（毎月一回五日發行）

明治四十年六月一日印刷
明治四十年六月五日發行
發行兼編輯者　辻本卯藏
印刷者　日下主計
發行所　女子高等師範學校内　弘道館
フレーベル會

序

文學博士　井上哲次郎先生
文學博士　元良勇次郎先生
文學博士　井上圓了先生
學習院女學部長　下田歌子先生

西山愁治先生編

日本家庭辭書

家庭の寶典　家庭の代表

畫伯不折の家庭團欒の美なる三色版口繪挿畫
中村不折畫伯の美なる頗入函裝洋判四六
本文七百六十餘頁船來上等紙數千
摺

正價一圓三十錢　特價九拾錢　郵税十五錢

家庭問題は今に殘されたる社會問題として又戰捷後必然に社會の要求する時代急需の聲に應ぜんとて世に出づる家庭向の著書敢て尠さにあらず尠からずと雖も惜むべし一時的際物の零片を充たさる即ち編者此に周到の用意多大の苦心抱負を以て本書を編纂せられたれば家庭は此れに依て光明に浴し新しき福音に接するもの尠からざるを信ず幸に世の流行的一夜作の駄編と同一視する勿れ本書の内容は

家庭組織　道德宗教
結婚制度　交際衞生　經濟
法律　禮式家具料理　行事裁縫園藝
汚點拔生花　洗濯養畜音　茶道教育
遊戲交通　樂工藝品

等に就て最も家庭に必要なる粹を拔きて千餘項を選擇し五十音順に配列し説明懇切苟くも事家庭に關して細大漏さず以て忠實なる家庭の顧問たるを期せり即ち本書を家庭必備の寶典として一般の家庭に獻じ進物殊に結婚出産の贈物として薦め又教育に熱心なる各學校教育家及び學生諸君の備品として推す幸に此の好機を逸せず購讀の榮を賜はらんことを

購讀者に注意　本書下題に類似の編者西山愁治發行所弘道館者有之購求者は弘道館に注意

發行所　東京神田猿樂町二番地　弘道館　電話本局二〇四八
發賣所　各地書店